大きな猫

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大きな猫

【Ｎコード】
Ｎ１２４５Ｑ

【作者名】
篠義

【あらすじ】
大きな猫を飼っている人の話　しばらく連載です

関西夫夫
関西弁で、字書きはできるのか？　で、はじまった、このお話。
意味がわからない言葉があれば、連絡ください。はははは。

1

十月の半ばぐらいになると、行き帰りに、ええ匂いがする。便所の臭い消しやとか、世間で言われているが、俺は、この匂いが好きで、いつも、この匂いが漂うようになると、秋やと思う。

「なあ、草花言うんは、ほんま、えらいよな？　」

「はあ？　おまえ、何言うとんねん？　」

晩飯の席で、しみじみと、そう言ったら、嫁に呆れられた。じぶじぶと焼けて音のする秋刀魚に、大量の大根おろしをのせて、はもっと、嫁は口に運ぶ。ちなみに、こいつは、大根おろしの上にポン酢をかけるという邪道に食い方だ。

「いや、あいつらな、別に会話するわけでもないし、携帯持っとるわけでもあらへんのにさ、ちゃんと、同じ時季に咲くやんか。せやから、えらいと思うんよ。」

「乙女心と秋の空か？　」

「・・・・おまえこそ、何ぬかしとんねん。」

「せやからやな。そういうアンニュイな気分っちゅーのは、乙女心ってやつやろ？　秋になったから、おまえも乙女心に火がついたっちゅーやつやないのか？　」

「ちょっと違う。」

「さよか。」

そういうのではなくて、どっちかというと、そういうふうに、会話するでもなく、同じように同じことが出来るのは、羨ましいと思ったのだが、俺の嫁は、情緒が欠落傾向にあるので、そういう叙情的な感情というものに鈍感だ。

「なんで、あんだけ本読んで、そういうことはわからんのかなー」

「どあほ、俺が読んでる本に、そういうもんはあらへんわ。・・・・なあ、花月、中国の人ってな、カエルが鳴いてたら、うまそうって思うらしいで。俺らが、水族館で鯛見て、うまそう、っていうのとおんなじなんやで？　なんか親近感湧くわー」

「あーあっちの人は食うんやんな。・・・って、俺の叙情的なええお話をカエルと掏り替えんなや。」

「おまえ、自分の面見てから、言え。」

「じゃかましいわ。ほれ、こっちも食べとき。これ、身体にええから。」

「これ、何？　」

「食用菊とシメジの和え物。」

「きくぅぅぅぅぅ？　」

「おう、これ、身体にええって、テレビでやってたんや。」

半信半疑で、嫁は、箸を出して、「あれ？　」　と、首を傾げた。

「ん？　」

「・・・うまいやんけ・・・・」

「あたりまえじゃ。うまないもんなんか出すかい。」

はごはごと、それを食べて、嫁は、「ほんで、おまえは何が言いたいんよ？　」　と、ようやく尋ねてくれた。

「離れた場所におっても同じようにできるっていうのが、ちょと羨ましいと思た。」

「・・・・俺・・・・離れるのはいややで・・・・・」

「そうやないんよ。仕事しててな、窓の外、覗いて、すっごい虹とか出ててさ。おまえにも見せたいなーと、俺が思たら、おまえも、そう思ってた、とか、そういう距離や。」

「ああ、そういうのか。」

そして、俺の嫁は、ご飯を一口放り込んで、それから、口元を歪めた。言いたいことはわかる。自分には、情緒がないし、些か壊れているから、そういうのは無理に違いないという自嘲だ。

俺のほうは、メシにお茶をかけて、茶漬けにして、さらさらと食う。別に、そんなことではないのだ。一緒に暮らしていて、相手を思う瞬間が同じようにあればいい、と、思うぐらいなのだが、これが、なかなか伝わらない。

「愛してんで。」

「はいはい。」

「うわぁー愛がない。」

「それは、後でええから、茶かけてくれ。」

「こっちの冷ましたぁーるやつな。」

「・・うん・・・」

俺の嫁は猫舌なので、熱いお茶なんてヤケドする。だから、最初から、お茶は冷ましてあるのだ。さらさらと、嫁も茶漬けをかきこんで、それから、お茶を飲んで、息を吐き出した。

「ごっそさん。」

「はい、おそまつさん。」

「・・あのな・・・・」

「うん。」

「そういうのは、わからへんけど、おまえが、そのお茶冷ましてるのは、愛やと思う。」

だから、俺も感じるもんはあるで？　と、俺の嫁は恥ずかしそうに微笑んだ。

2

金の流れというのは、慣れてくると、日報のチェックで異変を感じられるようになる。たぶん、慣れというか、多くのパターンを見た経験からなのか、なんとなく、ひっかかるのだ。

「東川さん、ちょっと、お願いします。」

幹部室から顔を出して、東川に声を掛けた。日報の作業をしていた東川は、「おう。」と、即座に飛んできてくれる。見たところ、厳ついおっさんなので、俺のほうが下っ端っぽいが、騙されて、俺は、このおっさんの上司になっている。

「なんや？」

とはいうものの、丁寧に喋るような関係でもないから、お互い、元のままだ。気さくにやってきて、幹部室の扉を閉めた。

「これ、なんかおかしないですかね？　なんで、毎週、土曜日の売り上げが落ちるんか、俺には疑問なんやけど。」

データは、サーバーへ集積されているから、一店舗の毎日の売り上げを表示することも可能だ。遊興施設なんてものは、週末とか、給料日とか、売り上げが上がる日というのが、はっきりしている。だから、その日は、他の日より売り上げは良いはずだ。だのに、ある店舗だけが、土曜日ごとに売上が下がるという異変が起こっている。例えば、毎週、その地域の同業者が、イベントやらで盛り上げているという外的要因があれば、それは、問題ではない。だが、そういう報告がないと何かが起こっているということだ。

「え？　・・・・・ああ、それな。俺も気にはなったんやけど・・・・小額なんでな。」

「せやけど、一ヶ月の増減は、結構な数字ですやんか。ここ、佐味田さんに調べてもらえませんか？　」

嘉藤と佐味田は、以前からの知り合いというか同僚で、沢野と堀内の直轄の部下だ。こういうことには、慣れているメンバーでもある。不正があれば、それを探り出す知識も方法も把握している。

「念には念を入れとこか。わかった、ほな、調べさせる。」

「すんませんが、お願いします。」

一応、頼むのだから、お辞儀をしたら、東川に呆れられた。ここの管理責任者は、自分なのだから、命令しろ、と、言われるのだが、これが、なかなか昔の癖が抜けない。今まで、同等の立場で仕事をしていたし、相手は年上だ。

「舐められたら終わりやぞ？　」

「俺は、ぼんくらの飾りということにしといたら、いろいろと話がわかりますやろ？　」

「・・・・まあ、そうやけど・・・・」

ここに所属している人間は、この幹部室に押し込められている俺が、どういうことをしているか、はっきりと知らない。だから、元からの噂を利用して、堀内の愛人が飾りに座っているのだと思わせ

てある。そのほうが、ここで、不正操作をされたりするのを発見しやすいからだ。どうしても、金が動く仕事だから、そういう危機管理が問題になる。互いが互いを監視するような、ギスギスした関係にはならないように、心がけているが、それでも監視は強めにしている。関西の支店での金の動きだけではない。ここでの情報も問題だ。だから、動きやすいように、俺は、ここで、のんべんだらりとしているように見せかけている。

「だいたい、俺の容姿と年齢で、管理責任者なんて、ありえへんって。東川さんのほうが、ずっと、それらしいやないですか。」

「経験年数は、おまえが、上じゃ。わしでは、この流れは、なかなか気付かれへんねから、やっぱり、おまえがやるほうがええ。とりあえず、佐味田に調べさせる。」

「ほんで、嘉藤さんには、こっち。」

「え？　」

「ここ、中部から店長が来てる。たぶん、これは、間違いない。すぐにやると思うから、嘉藤さんの子飼いでも潜入させといてくれ。」

「・・・他は？」

「後は、ちんまいから見逃しといたるわ。」

そこにある資料で読み取れるものは、たくさんある。売上と金の流れが合致しなければ、どこかで抜き取られている。多少のことは、構わない。どうしても、この業界は、裏で動かす金がいるから、それが、高額でなければ無視しないと、やっていられないからだ。あ

る程度の警告は出すが、それも、店長にメールを入れるぐらいで済ませる。

『売上と入金の差額があります。』という一文で、警告だと気付く店長は、それから元の流れに変える。それを言い訳してくる相手は、要注意で調べる。ある意味、嫌な仕事だが、これができるから、それなりの給金で雇われるのだから、文句は言えない。

・・・・・まあ、別にかまへん。俺は、こればっかりさせられてきたんやから。・・・・・

でも、たまに、気分が悪いこともある。東川を呼ぶ前に、その件の店長から怒鳴られていた。相手は、俺が小生意気な小僧だと思っているから、脅しつけてきたらしい。

・・・・あほやなあー。これで、おまえが金を抜いてるのは確定じゃ・・・・・

怒鳴られたくらいで、へこたれているほど、俺も弱くない。そんなものは、十年前に経験済みだ。堀内が、考えられる限りの悪態は、俺に投げていたからだ。お陰で、どんな罵声も気にならなくなった。

堀内は、別に優しいおっさんではない。使えると判るまでは、かなりしごかれる。それでも、沢野に言わせると、俺には甘かったそうだ。

「みっちゃんは、息子のつもりやったんちゃうかな。ほんで、おまえも、根性あったしな。」

「行くとこあらへんし、金払いええねんから、我慢する。」

「くくくくく・・・・ほら、そこや。そこが、堀内には楽しかったんやで？　あいつ、なんやかんや言うて、おまえを手放せへんもんな。」

まあ、沢野の言うことも一理ある。この業界で働くのに、一から仕込んでもらった。いろんな裏も、きっちりと見せて、厳しくしごかれた。そういう意味では、親みたいんもんやろう。

3

仕事帰りに、本屋に立ち寄って新刊を買った。シリーズのミステリーなんてものは、トリックが弱くても、そのキャラクターが、おもしろければ読めるので、なんとなく続けて買っている。すっかりと、日が暮れるのも早くなって、八時なんかだと、真っ暗だ。新月だったのか、月がないし、うっすらと寒い。そろそろ、コートを着ないといけないかもしれない。

・

家に帰って、自分の部屋に入ったら、ちゃんとクローゼットに、コートがかかっていた。たぶん、俺の旦那が気付いて出してくれたんだろう。

「水都、先、風呂入り。それから、明日からコート着ていきや。」

台所から叫ばれていることで、やっぱり、と、頬が歪んだ。俺が、どうこう考える前に、俺の旦那のほうが動いている。よくできた旦那なので、そういうことは手が早い。

食事も、温かいものが並んでいる。だが、それほど盛大に熱いものではない。なんせ、俺は猫舌で、熱いものは食べられない。

「湯豆腐とちゃうんか？　」

「おまえ、湯豆腐だけにしたら、栄養失調になるから、豚肉と菊菜だけ追加しといた。」

「これ、水炊きちゃうけ？　」

「どあほ、水炊きやったら、白菜が入ってる。これは、湯豆腐。」

「ようわからん理屈やわ。」

「なんでもええから食べ。豆腐は、そこに順番に冷やしてあるやつな。」

俺の前には、取り皿が何個か並んでいて、それに、豆腐が、一個ずつ入っている。俺が着替えている間に、準備してくれたらしい。よう、こんだけ手間かけるなーと呆れるのだが、旦那に言わせると、十年もやると癖になって、面倒ではないらしい。

適当に、冷やされた湯豆腐を食べながら、のんびりとテレビを眺める。これといって会話することもないから、ふたりして、ぼおーっとメシを食う。酒飲みではないから、小一時間もかからず、メシを食い終えると、鍋はコンロに乗せて、後は、さっさと洗い物をする。これは、俺の担当だ。それが終わったら、ようやく寛ぎタイムということになる。寒くなると居間のこたつで食べるから、そこを台拭きで、さっと拭いて、お茶を置いた。

スパーァーと、タバコの煙を吐き出して、ぎゅっと揉み消した。どちらも、テレビはＢＧＭ代わりにしているだけだから、画面は、ほとんど見ていない。

「なあ、花月。」

「んーーー？　」

「もよおした。」

「はあ、さよか。」

ほな、やりまひょか、と、寝転んでいる花月が、手をひょろひょろと振る。起き上がろうとした花月を、こたつから、ちょっと引きずり出して、俺が跨ぐ。

「およ？　こらまた珍しい。」

「たまに、ご奉仕させてもらう。」

「ちょ、待て。先に、ゴムとか取ってこんと。」

「用意した。」

「・・・・・なんかあったんか？・・・・・・」

まあ、こういうことは珍しいので、旦那も、なとなく気付いたらしい。怒鳴られたら誰だって気分は悪い。報復するにしたって、すぐにではないし、俺が直接やるわけではない。怒鳴られるのも給料の内だが、たまに、ムカつくやつもある。そういう時は、これが、ストレス発散させるのが、手っ取り早い。

「ストレス発散。・・・・・めちゃめちゃにして・・・・花月。」

「うわっ、寒っっ。おまえ、台詞下手すぎて、凍るからやめ。」

「サービスしたったのに。まあ、ええわ。とりあえず、動くなよ。動いたら、縛る。」

「なんじゃ、それはっっ。どんなプレー、ご所望じゃっっ。」

「襲うネコプレー。」

「あるかぁーーーっっ、そんなんっっ。」

「わかった。先に縛る。」

「いや、縛るな。もう、ツッコミせぇーへんから、縛らんでくれ。」

お互い、寝間着代わりのスウェットだから、脱がせるのは楽なものだ。煌々と明かりのついた居間で、ごろりと転がった旦那を脱がしにかかるのは、それなりに興奮する。

「おい、こっちにケツ、向けてんか？　嫁。」

旦那のほうも、ノッてきた。こちらも、ゴムを着けようとして、ふと、そのキズに目が止まった。あまり、旦那の、そこいら辺りをしげしげと眺める機会というのは多くない。普段なら、旦那が、こっちの身体を、さんざんぱら弄り倒しているからだ。

・・・・・・え？・・・・・・・・

多くはなくても、何度も見ている。だが、そこに、そんなキズは、見た記憶がない。ついでに、そのキズ、それほど浅いものではなさそうだった。もうちょっと、よく見ようとしたら、背後からの刺激で、飛び跳ねさせられた。

「水都さん、ぼちぼち、たのんまっす。」

「・・・・あっあほ・・・・ほんなら、動かす・・なや・・・・・・」

「奉仕すんねんやろ？　ほれ。」

「・・・・ん・・・・・やめや・・・・・」

「はい、ほんなら、襲いネコプレー終了。」

ころんと、横に転がされて、旦那が上から覗きこむ。とても楽しそうに笑っていて、かなり余裕のあるのが、ムカつくところだ。こっちは、まだ、弄られているから、満足に睨み返せもしない。

「なかなかエロかった。」

「・・・うっさ・・・い・・・・んんっ・・・・・」

「ほな、本番まいりましょうか？　」

「・・・はよ・・こいや・・・・ぼけ・・・・」

その時は、そちらに意識が向いていて、肝心なことを聞きそびれた。というか、完全に、忘れていた。平日は、あまり本気でやるとマズイので、大概は、一度か二度で終わる。たぶん、二度ではなかったと思うが、途中から、記憶がかなり怪しい。

4

「みっちゃん、昼飯どないする？　」

幹部室の扉を開いて、嘉藤が声をかけてきた。だいたいが、勝手に一人で外食するのだが、正午を過ぎても出て来ないから、心配されたらしい。

「・・・・すまん・・・俺、メシより睡眠やねん・・・・・・」

「わかった。」

来客用の豪華なソファに、ぐったりと伸びているので、嘉藤も納得したらしい。そのまんま、出て行った。週の早いうちに、こんなに体力を使うのは、まずかった、と、反省した。朝も起きられなくて、ぐだぐだで、旦那が無理矢理に着替えさせて叩き起こしてくれたから、どうにか出勤できた。

・・・・なんやったっけなあー・・・なんか、忘れてるんよ、俺・・・・・・・・

昨日、何かあったのだが、その後、ストレス発散して、ついでに、その何かまで、見事に忘れてしまった。どっかで、頭の片隅にひっかかっているのだが、それが、出てこない。三十過ぎると、どうも、脳みその性能も悪くなる。ぐたぐだと考えつつ、半分寝ていたら、なんだか、ドアの向こうが騒がしい。

ドアの向こうには、責任者の東川がいるはずだが、どうも、騒ぎが収まらない。東川も、元は、いろいろとあったおっさんだから、

堅気には見えない風貌だ。それに、騒ぎをふっかけられるとしたら、ほんまもんのやーさんぐらいだろう。五分しても、騒ぎは、そのままだ。こら、東川のおっさん連中は、外食に出たな、と、のろのろと起き上がった。それ以外は、堅気の従業員たちだから、騒ぎの対処なんてできないだろう。

・・・・・しゃーないなー、誰や・・・・・・

誰も幹部連中がいないのなら、仕方がない、と、起き上がろうとしたら、扉のほうが先に開いた。

「なんじゃ、また飾りしかおらへんのか。」

先日も、散々に文句を吐きに来た暇なクソ爺だった。市内にある店舗の店長なのだが、給料が低いだの、経費が足りないだのと、文句を吐きに来た。店長の給料というのは、規模にも拠るが、ほぼ一律だ。経費も従業員と規模によっているから、これも一律と言える。このクソ爺は、そんな規定すら無視して、とんでもないことを言うのだ。

「ここに来るのに、靴が減った。それと交通費。これは、おまえらが払え。」

もう、いきなり、これだ。せこいことばかり言う。先日は、従業員との懇親会の費用がないから出せ、と、言うものだった。それだって、ちゃんと、渡しているので、間に合うようにすればいいのだが、このおっさん、経費で、自分の服だのゴルフ道具だのを買って、一か月分の経費を消費していた。もちろん、それは注意して、給料から天引きという処置にしたのだが、それも納得できなかったらしい。

仕事に来るために着てくる服。仕事の付き合いで使うゴルフ道具。これらは、仕事に関係するのだから、会社で持て、と怒鳴りこんできた。

有り得ない、と、俺は、それを跳ねつけた。組合のゴルフの費用なんかだったら、もちろん経費で認めているが、個人的なものは、認められない、と、説明もしたが、聞く耳がない。全然、関係のない脅し文句とか罵詈雑言を、俺に吐き掛けて帰りやがったのだが、まだ、あるらしい。

「こっちは、汗水垂らして、せっせと働いてるっちゅーのに、ソファで昼寝とは、ええ御身分や。そんな暇があるんやったら、働け。この淫売。・・・・・専務に媚売って、ここで昼寝してるだけのくせに、えらそうなんじゃっっ。」

休み時間に昼寝してて、ドヤされるのは、どうなんよ？　と、思いつつ、起き上がった。せっかく、ストレス発散させたのに、また、ストレス溜まる。

「今日は、何の御用ですか？　先日のことでしたら、あれで、決定ですから翻りません。服とかゴルフ用品を買うのは、個人の買い物で、それは、認められへんし、従業員との飲み会も、経費で足りん分は、ポケットマネーでも使うとかして、埋めてください。他の地域の店長は、それでやってるのに、あなただけができないというのは、おかしないですか？　」

「じゃかましいっっ。おまえのその命令口調がムカつくんじゃっっ。・・・・・わしは、元々一流商社の部長まで行った男や。おまえみたいな若造に、難癖つけられることなんかあらへんぞっっ。おまえ

では、話にならん。もっと、上の専務でも呼べ。」

どうして、こういうヤツは、自分が勤めていた元の職場の地位を、とやかく自慢するんだろーな、と、思う。まず、退職して、どこも拾ってくれなかった時点で、それだけの人間だったと、気付け、と、俺は言いたい。優秀なら、早期退職も勧められないし、自主的に退職しても、どこかの下請けや子会社、関連会社から、再就職の誘いなんてものがある。この業界は、給料はいいので、それに釣られてきたのであろう。それで、これだから、相当可哀想なおっさんではある。元の職場が、どんなもんであろうと、元の仕事がどういう遣り方であろうと、それは、こちらとは、まったく違うのだ。この業界に、新人として入って来たおっさんは、ここの遣り方を覚えることが先決だ。

「専務は、本部におりますんで、こちらにはおりません。・・・・・・それから、専務に逢いたいということでしたら、スケジュールを確認して、こちらへ出向く日を連絡させてもらいますんで、それでよろしいですか？」

「今すぐ呼ばんかっっ。わしが呼んでるんじゃっっっ、それぐらいの都合はつけさせろ。」

・・・・・いや、おっさん、自殺志願者か？　堀内のおっさんに、そんなこと言うたら、シバキたおされるぞ？・・・・・

というか、誰や？　こんなアホの痛いおっさんを採用したヤツは・・・・と、俺は呆れつつ、「専務は、お忙しいので、できません。」と、一応、頭を下げた。怒鳴って、クビにする権利が、実は、俺にもある。関西統括責任者というのは、関西の人事権も持っているのだ。ただ、このおっさん、売上には手をつけていないし、借金も

ないから、そういう意味では、仕事は真面目だ。だから、クビすることもあらへんやろうと思っていた。

「電話しろっっ、わしが直接、話す。おまえ、愛人やねんから、携帯の番号ぐらい知ってるやろうが。」

「できません。」

「何様じゃっっ、おまえっっ。」

もう、いい加減、我慢すんのも、飽きたなあーと思っていた。殴りたかったら、一発は、殴らせて、とりあえず、「愛人の顔を傷物にした。」と、脅しでもかけようか、と、のんびり構えていたら、ドアは開いた。

「専務の愛人で、あんたの上司や。」

うわぁーまた、えげつないのが、来たなーと、俺は呆れて俯いた。沢野が、ひょっこりと顔を出したからだ。

「誰や、おまえ。」

「うわあー、失礼なこと言うヤツやなあー、わし、これでも、あんたの上司やのに。だいたいなー、公金横領しといて、まだ、この子にまで、文句を言うて、なんぼほど、アホなんや？　この子、専務の愛人やて知ってて、よう、そんな怖ろしいこと言うわ。」

・・・・・煽ってるしな・・・・・このクソ親父・・・・・・・

専務が一番お熱上げてるのに、この子にチクられたら、即刻クビ

やのに・・・・・と、さらに、なんていうか、その嘘臭い台詞は、やめんかい、と、内心で、沢野にツッコミつつ、睨んだ。

「ほら、この子、怖くて怯えてるやんかいさ。・・・・はいはい、もう怖くないで？　沢野のおっちゃんが怒ったるさかいな？　泣きなや？　」

・・・・・誰じゃっっ、このアホ呼んだのは・・・・・・余計、ややこしいっちゅーねんっっ・・・・・

常務の沢野は、元々は、こっちにあった会社の社長で、東海にあった会社と合併して常務に収まった。だから、堀内の上司で、現在も、大きくなった会社の経営をしているという、かなり厄介なおっさんだ。神出鬼没で、あっちこっちの店を、チェックしているから、いきなり現れても不思議ではない。保護者代わりの堀内と同様に、俺のことを世話もしてくれたおっさんだが、やることは、堀内に輪をかけてえげつない。

「沢野さん、こんな瑣末なことは、こちらで対処しますから。どうぞ、掛けて待っててください。」

慣れてないと、このおっさんの温和な口調に騙される。この店長を、どう料理したろーか、とか、考えているのだ、このおっさん。

「いややわー他人行儀にせんだかって、元々は、わしの愛人さんやのに。」

「何ぬかした？　このクソ爺っっ。」

「あれ？　秘密やったん？　いやー悪いわーバラしてしもたわぁー。

」

実は、扉は全開していて、そこから、他の従業員にも丸聞こえするほどの声で、わざと沢野は叫んでいる。余計な噂はいらんのじゃっっ、と、睨んで、乱暴にドアは閉めた。

「もう、ええから黙っとけっっ。・・・・・・あのな、おっさん、あんた、自分の服とか買った金は、公金横領になるんや。せやから、即日クビにできるんやで？　それでええんやったら、ここでほざいて、家帰れっっ。」

「なんやと？　おまえ、えらそうにっっ。」

「悪いけど、俺も、このクソ親父も、あんたよりエライんは事実や。・・・・・以前のあんたが、どれくらい偉かったか知らんけど、今は、その専務の愛人に顎でこき使われとるんやろ？　」

そう、これで殴らせて、ビビらせて、さっきの路線に乗せようと、ニヤリと笑ったら、「もう、よろし。」　と、沢野が前に出てきた。

「この程度のんは、ようさん、おる。身体張って残すことあらへんで？　みっちゃん。」

「いちいち、教育するより、あるもの使うほうがええ。」

「そんな貧乏性な考えはやめとき。今から、退職者が、ようさん出てくるから、もっと優秀なんを取ってもらい。・・・・・・東川、東川。」

扉を再度、開けて、沢野が大声で呼びつける。外食からは、戻っ

ていた東川が、慌てて飛んできた。

「あれ、クビの手続きしたってんか。みっちゃんに罵詈雑言は許されへん。」

東川が顔を出して、「また、あんたか・・・」と、呆れた顔をした。先日も、昼時に来て、昼時間一杯に騒いで帰ったからだ。

「東川さんっっ、クビって・・・わし、何も悪いことしとりませんでっっ。」

そして、こういうおっさんというのは、自分がやったことが、悪いとは思わない。先日も東川が、ちゃんと説明したのに、理解はしていなかったわけだ。人事の責任者は、別にいるので、東川が、そちらへ、その店長を引きずり出して行った。やれやれ、と、ソファに寝転んだら、沢野が、「ごはん食べようか？　みっちゃん。」と、覗きこんで来た。

「もうええ。俺、仕事あるから。」

「半日くらい、おっちゃんと遊んでくれても罪はあらへんやろう。せっかく、五月蝿いの追い出したったのに。」

「邪魔したくせに・・・・・あんな小心者のおっさんのほうが、金は使いこまへんから安全や。」

小心者だから、弱いものに吼える。だから、逆に大きなことは出来ないから、安全な店長ではあるのだ。

「堀内が怒ってたで？　みっちゃん、怒鳴られても黙ってるんやろ

？　噛みついてやったらええのに。」

「いちいち、やってたら、仕事にならへんやろ？　・・・・・堀内のおっさんが、なんで、こんな細かいこと知ってるんよ？　」

「東川に定時連絡させとるからやないか。知らんかったんかいな？　相変わらず、のんきさんやなあーみっちゃんは。おっちゃん、和むわー。」

あはははは・・・・と、大笑いした沢野が、「ほな、卵焼き食べよ。」　と、俺の手を掴んで無理に起こした。なぜ、こいつらは、こうも、俺の安眠を邪魔するかなーと思いつつ立ち上がった。

5

連れて行かれたのは、明石焼きの店で、昼時も終わって空いていた。奥まった場所に案内されて、明石焼きが運ばれてくる。湯気が、もうもうと上がっている明石焼きと、その汁なんてものは、俺には食える代物ではない。

目の前では、沢野が、はふはふと、それを食べている。

「ほんで？　」

「何が、『ほんで？』なんや？　」

「なんか話があるから、連れ出したんやろ？　」

「用事はあらへん。ほんまに、卵焼きが食いたてな。みっちゃんにも奢ったろうと思ただけや。」

「・・・・あのな、沢野さん。あんなええタイミングで現れて、それはないやろう。だいたい、おっさんは、中部の梃入れしとるはずや。なんで、関西におるんよ？　」

このおっさん、会社の経営をやっている、とても偉いおっさんなので、こんなとこで、ふらふらしている時間はない。何事かあるから、顔を出したはずだ。だいたい、うちの会社は本社が中部にあるから、おいそれと、こっちへ戻ることはないのだ。

「タイミングはな、ほんまに偶然なんや。」

二人前の明石焼きを食べ終わったおっさんは、ずぞーっと、汁を飲み干している。腹が減ってたらしい。まだ、俺は手もつけてないというのに、早食いすぎる。

「ほんなら、なんや？　」

「もう冷めてるやろ？　先に食べ。」

「聞いてから食う。話し次第では、これに手をつけんのは危険や。」

たかだか、明石焼きだが、奢られたら、なんか因縁をつけてくる場合がある。だから、話は先に聞くほうが安全だ。こんなややこしい地位につけられたりも、前回、このおっさんらに騙されたせいだから警戒はしなければならない。

「相変わらず、用心深いこっちゃな。・・・・いや、用件は、おまえさんに一回、本社へ出向いてもらう用事がでけたさかい、連れ出しに来たんや。」

「え？　」

「よう考えたら、代取の社長にも紹介してへんし、本社の連中に顔だけでも見せとかんと、あかんやろう？　ほんで、おっちゃんが誘いに来たっちゅーわけや。」

「電話でええんちゃうんか？　」

「ははははは・・・・おまえさんのこっちゃから、仮病でも使こて、東川を代理で寄越すに違いない。」

ちっっ、と、舌打ちして、明石焼きに手を出した。つまり、俺の元気なとこを確認しておけば、仮病も使えまいという牽制らしい。ばくばくと、程よく冷めたのを食べて、けっっと、もう一度、舌打ちした。

「挨拶だけなんか？　それ。」

「うん、挨拶だけ。」

「ほな、日帰りでええよな？　」

「それはしんどいやろ？　なんぼ、新幹線で小一時間やっていうても、晩御飯食べてからやったら、新幹線もあらへんで。」

「なんで、晩御飯？　」

「一席設けて、挨拶して懇親せんとな。代取だけやないで、あっちの幹部は全員、顔合わさせる。」

「んな、面倒なこと、俺はいらん。」

「そうもいけへんやろ？　なあ、みっちゃん、おっちゃん、もう、社長と約束してしもたから、みっちゃんがけぇーへんかったら、怒られるねん。おっちゃん、助けると思て頼むわ。」

絶対に演技なので、しおらしい態度に騙されてはいけない。だいたい、このおっさんが叱られるなんてことは有り得ない。社長は、合併した相手先の社長がついているが、実質、経営しているのは、このおっさんなわけで、社長だって、それには口を挿めないはずだからだ。

「いやや。・・・・ここの払いは割り勘でええわ。」

「そんな水臭いこと言いなや。・・・・二日だけでええから。」

好きなもん買うてやるで？　と、俺は、どこのガキやねん、と、言う台詞まで飛び出した。意味がわからへん、と、残りを食べ終えて、伝票を掴んで、レジへ向った。

・

もちろん、そんなことで引き下がるおっさんではない。会社へ戻ったら、沢野のおっさんは封筒を差し出した。それには、辞令と書かれていて、一週間の本社研修という名目の拉致が記されていた。

「こんなん、ほんまは出したないから、おっちゃん、優しい言うたのになあー」

「・・・・他に言うことあるか？　本社研修て、なんやねんっっ。」

「まあ、そういう名目で本社見学して、おっちゃんと遊ぼうっちゅーことやな？　」

明日、家まで迎えを寄越すから、準備しといてなー、と、朗らかに笑いつつ、沢野は、さっさと帰った。すでに、東川には連絡がされていたらしく、資金繰りのほうは、一週間、とりあえず動かしておくということも言われた。

「こういう時こそ、東川さんやないのか？　」

「いや、そうやないらしい。なんか、本社の幹部連中が、『堀内の愛人を拝ませろ』って、ごねてるらしいで？　」

年齢からして、責任者然としている東川が、そこへ出向けば問題はない。普段は、そうしている。本社へ出かけるのは、いつも東川の仕事だ。だいたい、俺の姿なんてもんは、屁のツッパリにもならんのは、一目瞭然だ。だが、どうも、そういうことではないらしい。関西統括責任者に就いた人間が、本社に、一度も顔を出さないとは、どういうことか、と、いうことになっていると、東川は言う。それも、『堀内の愛人』と言われている人間が、どういう人間なのか拝みたいとかいうことにもなっているのだと言う。

「俺はパンダとちゃう。」

「いや、そうやない。たぶんな、沢野さんが、本社の人間をびっくりさせたいだけやと思う。今度ばかりは、おまえが行かんとあかんみたいやから、我慢してくれ。」

実は、東川の説明も嘘だ。本社の人間に顔を見せておきたいというのが、その意図だと、東川は知っている。関西方面の人事を勝手にしているが、それは実力主義だからだ、と、沢野は証明したいのだろう。なんせ、浪速は、見た目には、小憎たらしい小僧だが、仕事のほうは、東川でも同じに出来ないほどの実力が備わっている。本来なら、本社で堀内の補佐をしているはずの人間だ。それが、関西に引き篭もっているから誤解されているのだ。堀内が身内贔屓で取り立てたと思われているらしい。

「一週間か・・・・」

「まあ、そう面倒がらんでも、たまには、沢野さんの遊び相手した

ったらええがな。」

それらの評価を覆すには、当人が出向く他はない。もしかしたら、一週間では済まないかもしれないのだが、それも、東川は口を噤んだ。

・

・

「本社研修？　おまえが？　」

家に帰って、旦那に告げたら、やっぱり、びっくりされた。まあ、それはそうやろう、あんなヤクザな業界で研修なんてあると思うほうがおかしい。

「んー、行きたない。」

「せやけど、行かなあかんねんやな？　」

「・・・・・なあ、花月。」

「それ、あからさま過ぎるやろ？　だいたい、あのおっさんらが、それぐらいで折れるとは、俺は思われへんぞ。」

介護老人並みに弱らせたとしても、おそらく、そのまま搬送されるのではないか？　と、俺の旦那は言う。たぶん、それは正解だろう。沢野は、新幹線とは言わなかったし、クルマで移動しているからだ。

「途中の土日は帰って来たらええやん。ほんなら、三日の出張と、二日の出張っちゅーだけのことや。」

「なるほど。」

「帰れられへんかったら、連絡して来い。俺が行ったるわ。」

「・・うん・・・・」

一週間は長い。花月が出張した時も、俺は、おかしくなっていたらしいので、まともでいられるか、どうかが、かなり怪しい。それは、旦那である花月も判っているから、そう提案してくれる。

6

一週間、と言っても、土日を挟むから、実質は五日ということになる。とはいえ、ワイシャツやネクタイは、コンビニでも買えるが、スーツは、そうもいかない。ワイシャツを三枚、スーツを別に一着、それから、七日分の下着などを用意したら、結構な重量になった。まあ、帰りは、宅急便でもすればいいだろう。翌日、俺が出勤する時間に、迎えのクルマがやってきて、寝惚けたまんまの俺の嫁は、引き摺られるようにして、連行された。携帯も充電器もあるから、どこにいても、連絡は取れるはずだ。

・

帰っても、誰もいないとなると、食事も外食になる。面倒なので、同僚の御堂筋あたりと飲み屋なんてことになったりもする。

「なんや、奥さん、出張なんか？　」

「せやねん。物足りひんのよ。すること、無くってさ。」

「え？　普通、命の洗濯タイムと違うか？　」

「そうなんやけどさ。当たり前すぎてな。・・・・俺、嫁がおらんと生活潤わへんらしい。」

「かなんなあー、そんなに見せつけんでもええやないか。」

実際、手間のかかる嫁がいないと、とても暇だ。食事とか部屋の温度とか、生活環境を整える必要がないとなると、やることがない

のだ。それらを鑑みた場合、より依存しているのは、俺？　という結論さえ導き出されたりする。

「ほんで、俺と飲んでるわけかいな。かなんなあー。」

「おまえかて、彼女は、どーしたんよ？　」

「ああ、なんか、今、忙しいらしいねん。」

御堂筋の彼女は、流行りの言葉で言うと、腐れ女というヤツで、男同士のホモ話が好きという、けったいな人だ。それで、実在する俺と嫁について、いろいろと探りを入れてきたりするが、御堂筋が適当に止めてくれているらしい。

・・・・・別に、変わらへんと思うけどな・・・・・・

ノンケだった俺から言わせてもらうと、別に、これといって、普通の夫婦と変わるところはない。最近は、どちらも働いている夫婦が多いから、子供のいない夫婦だって、俺らと似たようなもんだろう。まあ、違うのは、俺の嫁が些か壊れていて、楽しいところかもしれない。

・

毎晩、電話はいれている。毎日、「もう、飽きた。うざい。うっとおしい。」　という、呪いの言葉が耳に届く。声だけでも聞かせていれば、俺の嫁も元気ではあるらしい。

「どこが、研修やねんっっ。いきなり、中部の仕事させられてるんやぞ？　研修なんかあらへんやんっっ。実習やんっっ。」

「・・・・うーん、ガンバっっ、俺の嫁。」

「じゃかましいっっ。なんで、ここまで来て、本気モードやねんっっ。」

「メシは？　」

「食べてる。でも、美味ない。」

「土日は帰れるんか？　」

「帰る。絶対、帰る。俺の忍耐力が折れるから帰る。」

「はいはい、帰って来い。・・・・俺も、なんかさみしいわ。」

俺のしみじみとした言葉に、一瞬、沈黙した俺の嫁は、ふう、と、これみよがしに息を吐いた。

「みやげ・・・・・買おて帰る。」

「うん、おおきに。」

「もう寝る。」

「うん、おやすみ。」

携帯を切らずに、そのまま聞いていると、小さな声で、「花月のあほ、ぼけ、かすっっ。さみしんは、一緒じゃっっ。」　と、罵っている声が聞こえる。それから、「帰りたいなあ。」　と、言いつ

つ携帯は切れる。たぶん、俺の嫁は、俺が聞いているのを知らない。

・・・・こんな可愛いとこ、知ってるんは、俺だけなんやろーなー・・・・・・

十年は、かなりの時間だ。お互い、傍に居るのが当たり前になったから、たまに離れると寂しいと思う。仕事だから、仕方がない。俺が、出張することもある。こういう時に、お互い、どれだけ、相手がいることが幸せなのかを考える。

・・・・金曜日、迎えに行くって、どーやろう。どうせやったら、家やなくてもええんやないか・・・・・・

ふと、思い立って、そんなことを考えた。金曜日に、レンタカーでも借りて、ぶらぶらと週末をドライブするのは楽しいかもしれない。別に、家に帰らなくても、顔を合わせればいいのだから、そのほうが早く逢える。金曜日の仕事の予定がわかったら、メールで連絡しておこう、と、思っていたら、意外なことになった。

「え？　木曜から東京？　」

翌日、課長に申し渡されたのは、東京での研修だった。これといって、重要ではないのだが、顔は出さなければならないというヤツなので、比較的暇にしていた俺が指名された。

「木金で、研修と懇親会。解散は、金曜の夕方や。適当にレポート書いて出してくれたら、それでええ。頼むわ。」

「まあ、よろしいけど。」

レポートが、ちょっと面倒だが、それ以外は、有難い内容だ。嫁と合流するのなら、ちょうど新幹線で二時間という場所なのだから、大変有難い。向こうで、レンタカーを借りるなり、こっちへ、同じ新幹線で帰ってくるなり、なんでもありだ。

7

移動がクルマだったので、本社まで爆睡させてもらったのだが、その後は大変だった。いきなり、本社ビルへ連れ込まれたと思ったら、俺の職場と同じような機械が並ぶ部屋へ放り込まれて、帳表のチェックを申し渡された。

「おかしい思うんは、付箋つけといてな。それから、こっちは、日々の流れ。こっちも、頼むわな。」

沢野は、言葉遣いは丁寧なのだが、本当にえげつないおっさんで、半年前の中部の資料のチェックをやらされる羽目になった。一店舗分だけだと思っていたら、後から後から書類が運び込まれてきて、どう考えても中部全域ちゃうんかい？　という量になった。

・・・・これが研修？・・・・・・

どう見ても、鑑査というものじゃないか、と、思いつつ、とにかく片付けることにした。半年分で、十数店舗となると、帳表のチェックなんて紙でするもんじゃない。置いてある端末を立ち上げて、それで、ざーっとチェックして、おかしいものには、その帳表に付箋を貼る。何店舗かやって、ちょっと首を傾げた。どう考えても、余計なモノが多すぎる。

・・・・・交際費とかの比率おかしいんちゃうんか？・・・・・・

例えば、陳列する景品用の商品でも、高価なものが、毎月購入されているの。あれは、見せるもので交換する客はいない。つまり、半年とか一年くらいは、同じモノでいいわけで、新鮮味がなくなっ

たら、他の店舗と交換したりする使い回しするものなのだ。

「付箋が足りんような気がするわ。」

ふう、と、息を吐いて、横を見たら、弁当とペットボトルが置かれている。いつのまにか、届けられたらしい。腹が減ったから、それを掻き込みつつ、ちょっと考える。つまり、経費が、これだけ使われているとしたら、資金運用のほうも、とんでもないのでは・・・・・というのが、簡単に予想がつく。それらを考えて、やれやれと肩を落とした。沢野がさせたかった仕事は、全店舗管理だったわけだ。

・

・

そろそろ帰ろうか、と、呼びに来た沢野に、本日、付けたおした付箋を見せた。

「どう考えても、おかしいやろ？　本社って、こんな甘アマなことやってんのか？」

「ん？」

「計算すんのも面倒なくらい、使い込みしてるし、その分、資金もようさん回してやってるやんか。これは、なんじゃ？」

「やっぱり、そうやった？　いやあーさすが、みっちゃんやわぁー、半日で、もうわかったんかいな。うちの子は、優秀やそう。」

ニコニコと沢野は、笑ったフリをする。騙されてはいけない。こ

のおっさん、演技は役者並だ。背後にいる男に、「ほれ、うちの子が証拠をみつけてくれましたで？　」、と、笑っている。

「説明してくれ。どこが、おかしい？　」

その男が前に出てきて、怒鳴りそうな大声で、俺を睨んだ。そら、怒りたいやろう。いきなり、やってきたヤツに、自分の職場を荒らされたら、誰かって、ええ顔はできん。

付箋を付けたところを、取り出して、そこから説明した。とりあえず、一店舗についてだが、それが、他も同様なのは、付箋を見ればわかる。

「・・・・つまり、この数店については、悪質通り越して、私有物化させとると言うことです。それで、何がどうしてんのか知らんけど、そこへ、金も流れてる。儲かってる店舗やのに、収支トントンって、どういうことですかね？　」

わかりやすいところを取り出したから、相手も、ちょっと顔色が悪くなってきた。どこまで、喋っていいのか、よくわからないが、そのうち、沢野が止めるだろうと、とりあえず、説明することはした。

「どうですやろな？　うちの子は、予備知識なしで、連れてきたさかい、冷静な判断をしてくれてるはずですわ。」

「・・・いや・・・・・そこまでとは・・・・・・」

「同族会社やったら、身内だけやさかい、かましません。せやけど、うちと合併して、利益を、こんな形で食われるのは、困りますんや。

社長。」

沢野の言葉に、げっっ、と、俺は顔を上げた。自分とこの社長の顔も知らないことが、モロバレした。

「ええんや、ええんや、みっちゃん。おまえ、本社へ来たの、初めてやもんな。社長の顔を知らんで、おかしいことあらへん。」

「いや、えーっと。・・・・・不躾な態度ですんません。俺、関西から出たことあらへんもんで。」

「こちらこそ、こんな若いとは思ってなくて、失礼しました。」

うっかりしていたが、いつも、東川が、本社へ出向いているので、そっちが、統括だと思い込んでいた、と、社長も言う。そら、もっともです、と、俺も頷く。

「難しい話は、わたしらだけでよろしいやろう。・・・・みっちゃん、下に堀内が待ってるから、もう帰り。」

たぶん、このおっさん、社長を、この証拠で締め上げるつもりだ。だから、俺を外す。俺も、沢野のおっさんのネチネチ攻撃なんか聞きたくないから、挨拶して、さっさと廊下へ出た。エレベーターで、一階に降りると、そこには、堀内が待っていた。

「ごくろーさん、うまいことといったか？　」

「俺は知らん。言われたことはやってきた。・・・・帰れって、沢野のおっさんが言うとったから、駅まで送ってくれへんか？　」

一週間だというから、結構、大きなカバンを下げている。一日で済むなら、大袈裟に言うな、と、内心で、沢野にツッコミをいれる。

「はあ？　何言うてんのや？　・・・・今日は、会社から帰ってもええっちゅーただけやろ？　あほ言うてんと、メシいくぞ。」

「もう、仕事は終わったと思うんやが？　」

「ははははは・・・・あれ、中部半分くらいや。後半分と、東海も残ってる。ついでに、わしのほうの仕事もしといてくれ。」

肩にかけていたカバンを堀内が取り上げて、背中を押される。逃げないように、肩まで抱いてくるのが、とてもうざい。

「何がええ？　」

「マクドかうどん。」

「・・・・・もうええ・・・・・おまえに聞いたわしがあほやった。」

ほれ、行くで、と、そのまま本社の玄関を通り抜けたが、背後からの視線には気付かなかった。

8

まず金に興味がない。野心がない。女を宛がわれても、それに貢ぐことはない。というか、女に興味がないから、それに惑わされない。

「ほんで、おまえが、きっちり教え込んであるから、容赦なく、指摘してくる。これほど、ええ子はおらんやろうな。」

それから、丸二日、水都は本社の会議室で、監査をしている。ついでに、堀内の仕事も押し付けてあるのだが、それも、すらすらとこなしているわけで、堀内も少し余裕ができた。たまには、ゆっくり、昼を食べようと本社の近くの店で、沢野と食事をとっている。沢野のほうも、最初の思惑通りに、中部の梃入れができたので、上機嫌だ。初日に、容赦なく、使い込みの事実を、社長に指摘したので、そこいらの処分なんかが、簡単に出来た。

合併した会社は、親族経営だったので、その悪癖が、今も健在で、そこのところが頭痛の種だった。こちらが、証拠を提示したところで、「まあまあ」と、社長は、のらりくらりと交して来たからだ。さすがに、幹部でもない浪速に指摘されたら、動かざるを得なくなった。

「ほんま、わし、そろそろ楽したいんよ。」

「やってみたら、よろしいがな。お手並み拝見といきますわ。」

本来なら、浪速を、こちらに呼び寄せて、本社のほうで、全店舗管理をさせたいのだが、生憎と、これが動かないから厄介だ。

「・・・堀内・・・・・みっちゃんに甘すぎるんやないか？　」

「甘いですやろな。せやから、わしは、やれません。」

もちろん、堀内だって、浪速を呼び寄せる算段はした。だが、呼び寄せたところで使い物になるのが数年と予測できてしまったら、言えるはずもない。どんな手を使おうと、水都は、撥ね退けることができる。普通の方法は使えないし、強制したところで、従うわけもないのだ。

「あのバクダン小僧に、重い病気でもさせたら、どうや？　」

「どうやって、あの至極健康なあほが、患うんか教えてくださいや。」

金に興味がないというのは、一番厄介だ。仕事では、それは使う者にすれば有難い特性なのだが、それで揺れてくれないから、動かすことができない。強制すれば、「辞める」　と、簡単に逃げられてしまう。だから、関西統括を、わざわざ関西に置いたのだ。

「ほんでな、沢野さん。みっちゃんは、あのアホがおらんと、おかしくなるから、長いことは引き留められへん。」

旦那がいないと、人生の投げ遣り度がアップして、仕事はするが、それ以外は、どうでもええ、というようなことになって、とても危険なことになる。過去、何度か、その現場を見た堀内は、引き剥がす真似を諦めた。高校生の浪速の状態に戻ってしまうと、数年したら突然に動かなくなるだろうと予想できたからだ。以前なら、自分が面倒をみれた。だが、それでも生かしておくだけの状態だったし、吉本が傍に居るのとは、かなりかけ離れた状態だ。

「まあ、この業界に流れてくるのに、マトモなもんはおらんっちゅーこっちゃな。」

「そういうことですやろうな。・・・・それで、社長はなんて言うてますんや？」

「本社に欲しいと言うとったわ。今夜、席誂えてくれてるで？」

「くくくくくく・・・・・うちの子飼いが欲しなったか？　どあほやな？　まあ、ええわ。わしも出るからな。」

「おう、せいぜい見せつけてやれ。」

本社の幹部連中は、ほとんどが親族で、どうしても、社長も身内は庇ってしまうので、ついつい、処分も甘くなりがちだ。だが、それでは、このグループは発展しないのは、社長のほうもよくわかっている。次の合併を考えている相手があるから、親族を外して、もっときっちりした経営陣に一新したいと考えているのだ。

・

・

三日目ともなると、水都の機嫌も悪くなる。毎晩、電話をしているが、それだって、長い時間ではない。本社の連中が話しかけても、無視だし、幹部の若いのが嫌味のひとつでも繰り出そうものなら、クリティカルヒットで応酬する。

「俺が連れて来られたんは、おまえらが、ぼんくらやからやないか

？　もうちょっと、その賢い頭使こうて、わからんように金を抜けや。ほんだら、俺かて、こんな面倒なことさせられへんのじゃ。」

一流私大を出たと自慢した幹部に、そう牙を剥く。相手は、いきりたっているが、それも、さらっと無視だ。ちょうど、そんな場面に出くわして、堀内は爆笑する。この毒舌だけでも、普通の人間には痛いだろう。長年、堀内によって鍛えられているため、毒舌も、ほとんどが、同じノリなのだ。当人は、それが、酷い罵声だと気付いていないのも、ミソといえば、ミソかもしれない。

「みっちゃん、ごはんに行こか？　」

「だいたい、終わった。・・・・なんで、こんなにアホばっかりなんよ？　」

「おまえみたいな厳しい管理してないからな。」

「サボりすぎやろ？　おっさん。」

「わしかて、忙しい。なんでもええから、システムを落とせ。・・・・これから、宴会や。」

「はあ？　」

「わしの愛人のお披露目をさせてもらう。」

「なんや、俺が客寄せパンダか？　うっとおしいことさせよるで。」

ふんっっと、鼻息も荒く、システムをダウンさせている水都は、若い幹部なんて、完全に眼中にない。おまえも呼ばれてるやろ？

と、堀内が退出を勧めると、そそくさと逃げ出した。見た目は、ぼんやりした小僧だから、見くびられているわけで、その毒舌の破壊力を知れば、余計なちょっかいをかけてこなくなるのは明白だ。ついでに女子社員も、専務の愛人という噂は知っているから、アプローチもしないらしい。

「俺、明日、休みやんな？」

帰り支度をした水都が、ようやく、立ち上がる。

「おう、休みやな。どっか行くか？」

「いや、旦那が来るから、二日間きっちり休ませてもらう。」

水都の旦那は、相も変わらず、女房にメロメロであるらしい。わざわざ迎えに来るんかい、と、堀内もツッコミのひとつも入れる。

「ちゃうんや。あっちも東京へ出張で、帰りに、拾てくれることになったんよ。家に帰ることもあらへんし、この辺りをドライブでもしよかって言うてんねん。」

「ふーん、浜松でウナギでもいてこましてきたら、どないや？」

「花月は、長野のほうの温泉って提案してたけどな。」

「じじむさいのーーーおまえの旦那。」

「うっさいわ。」

ふたりして、普通に会話しているのだが、中部の人間にとって、

この会話が、すでに言葉の暴力レベルになっている。だから、誰も近寄らないし、遠目にしているだけだ。

9

大きな宴会場かと思っていたら、こじんまりしたところだった。とは、いうものの、社長、副社長、営業本部長、東海統括部長、中部統括部長、総務部長という、偉いおっさんたちの集まりで、それに、沢野と堀内と俺という集まりだった。最初に、関西統括部長だと紹介されて、そんな役職やったかいな？　と、俺は首を傾げつつお辞儀だけした。各人の紹介が終わると、料理が運ばれてきた。適当に、ビールが開けられて、面倒臭い宴会が始まる。

・

「なんや？　これ？　真っ黒やんけ。」

「醤油が違うんや。卵つけたら、うまいから。」

すき焼き鍋が、真っ黒だったのには、驚いた。名古屋コーチンという鶏のすき焼きだと、堀内が説明してくれた。

「やっぱり、薄味の関西の人は、びっくりされるんですなあ。」

俺の隣りの総務部長が、俺の声に反応して微笑んでいる。だいたいが、俺より年上のおっさんで、東海と中部の部長が、俺と変わらないぐらいの年齢構成だ。

「すんませんなあ、鶴舞さん。うちの子、外へ出してませんよって礼儀もなんもありませんのや。大目にみたってください。」

「そら、堀内さんの噂の人ですからな。・・・・まあ、お近付きに

一杯。」

ビールぐらいなら、まあ、ええか、と、グラスに注がれたものを飲む。返杯しようとしたら、鶴舞というおっさんは、いやいや、と、手を振った。

「申し訳ないが、今、ドクターストップがかかってましてな。この間、盲腸の手術したから、しばらく禁酒生活。」

下腹の辺りを擦りつつ、そのおっさんは笑っている。酒ぐらいしか楽しみがないのに、殺生なことだと言う。

・・・・・・・あれ？・・・・・・・

なんだか、どこかで、繋がった。

・・・・もうちょう？・・・・・・

ガヤガヤという喧騒を無視して繋がったことを思い出そうとしたら、横手から顎を掴まれた。そこから、温かいものが口に入ったが、それも無視だ。

・・・せやんか、一週間って言うたら、ちょうど、それぐらいや・・・・ほんで、あのキズ・・・・ただの怪我にしては、くっきり残ってると思たんよ・・・・・・・

さらに、騒ぎが大きくなったので、思い出したことを整理し終えて、意識を戻した。途端に、とんでもないことになっていた。堀内が俺の口を開けさせて、煮えたニワトリを食わせていたからだ。

「ああ？　」

「ああ、やない。ぼおーっとしとるから食わせてやったんやろうが。」

「やめろや。ガキやあるまいしっっ。」

「おまえは、いつまでたってもガキじゃっっ。」

ほれ、と、さらに、箸で野菜を詰め込まれる。考え事をしている時は、たまに、こんなことになるので、そのまんま食べる。だが、周りは、しーんと静まり返っていた。

「堀内、そういうことは、ふたりだけでしてくれるか？　みな、びっくりしとるやないか。」

沢野が笑いながら、堀内の背中を叩く。堀内の愛人という噂を肯定させているようなものだが、当人たちが、そのつもりで振舞っているので、これでよかったりする。

「なあ、浪速君、きみ、こっちで働く気はないかな？　」

社長の栄が、目の前にやってきて、いきなり口を開く。

「はあ？　」

「本社なら、堀内さんと一緒に暮らせるし、給料なんかも、かなり上げられると思う。悪いことは、何ひとつないだろう？　」

「なんで、このおっさんと同居せなあかんのですか。三日と持ちま

せん。・・・・俺、本社で働く気はありませんから。強制的に転勤とか言うことやったら・・・・・」

辞める、と、言おうとして、堀内に手で口を塞がれた。

「社長、そんな、一足飛びに誘うてもろては、困りますで？　うちの子、奥ゆかしいんですわ。」

「専務、そう言う問題じゃなくて、本社の監査機能を考えたら、それが一番だと思うんだが？　」

「と、おっしゃっても、これは関西に置いておくほうがよろしいんやわ。月の半分は、あっちですさかいな。これが、こっちん来たところで、やっぱり月の半分しか一緒やない。わしからしたら、関西に置いておくほうがよろし。」

こちらの水は合わへんのですわーと、堀内が笑って、栄にビールを注ぐ。今回は、たまたま、監査させることになったから呼び出しただけだ、と、言い張る。

「しかし、堀内君、きみだって、浪速君が本社で補佐してくれるほうが、何かと便利ではないかね？　」

「いや、そんなに仕事ばっかりさせたら、夜の相手してくれまへんがな。矢場さん。」

副社長の矢場まで詰め寄ってきたが、これも笑い飛ばす。おまえらに、みっちゃんを使わせてやるもんか、と、内心でせせら笑っているが、それをおくびにも出さないのが堀内だ。この親族経営の遺物たちを追い出して、最終的に本社を関西に戻すつもりをしている。

そのために、関西だけ関西で統括部門を作ってある。その要でもある浪速を、本社なんかに来させるわけにはいかないのだ。

「いちいち、べたべたすんなっっ、きっしょいんじゃっっ、おっさんっっ。」

水都の肩に後ろから顎を乗せて笑っている堀内は、水都に肘鉄を食らっても笑っている。

「まあ、この通りのじゃじゃ馬でしてな。あんたらでは、無理ですわ。・・・・・・ビール、飲み、みっちゃん。これ、高いエビスの限定や。」

机から、それを持ち上げて、水都のコップに注ぐと、大人しく、それを飲んでいる水都は、命じたから従っているように見えるが、実は、高くて限定でおいしいエビスのビールが、タダで飲めるということに反応している。それを知っているのは、堀内だけだから、他人様からすれば御しえているように思われるというのも計算のうちだ。

「みっちゃん、今日はおっちゃんと風呂入ろうな？　」

「あほかっっ、変態っっ。」

「恥ずかしがり屋さんやからなあ、みっちゃんは。」

「一回、賽の河原まで散歩でもして来いや、おっさん。」

いつもの会話なのだが、知らない人間には、浪速の言葉は強烈で、さすがに腰が引ける。まあ、飲め、と、堀内ががんがんとすきっ腹

に飲ませたら、浪速は、すぐに酔っ払った。これでは冷静な話し合いなんて望めない。

10

あれは、一昨年のことだった。俺の旦那は、この十一月に一週間の東京出張で留守をした。なぜだか、携帯の充電器を忘れていて、連絡は、相手から唐突にやってくるだけで、こちらからは通じなかった。よくよく考えたら、コンビニにいけば、充電器は売っているものだったし、ホテルなんかには、そういうサービスだってある。それなのに、俺の旦那は、それで押し通したのだ。その時は、帰って来た旦那に、ほっとしたから、それだけで満足した。

たぶん、俺は、それが、記憶のどこかでひっかかっていたのだろう。

・

・

「おまえ、どこにおるんや？・・・・ああ？・・・・ああ、そこからやったら、タクシーで・・・・おう・・・・・場所は・・・・うん・・・そうそう。みっちゃんが、酔っ払ってお陀仏しとるんや。」

タクシーに乗ったところまでは、覚えている。堀内が、どこかへ電話しているのも耳には届いていた。酔うと心臓がバクバクして苦しくなる。そうなると、頭も動かない。こういう場合の対処法は、とにかく寝てしまうに限る。アルコールが消化されるまで寝ていれば、起きても苦しくないからだ。

「おまっっ、こりゃ、みっちゃん、まだ寝たらあかんっっ。もうちょっと起きといてくれ。」

堀内は慌てているのだが、そんなものは無視だ。とにかく眠れば苦しくない。だから、俺は眠るのだから。

・

・

俺の嫁が宿泊しているビジネスホテルの近くで、晩メシを食いつつ、連絡を待っていた。急遽、宴会が入ったから、かなり遅くなるというメールは、もらっていたから、気長に待つつもりで、雑誌を何冊か買ってきた。しかし、意外に早い時間に携帯が着信した。名前は、変態親父だ。

「みっちゃんが、酔っ払ってお陀仏しとるんや。今夜、わしとこで、おまえも泊まれ。場所は・・・・・・」

こちらの返事なんか聞かないで、いきなり住所を言い出す。慌てて、ファミレスのアンケート用紙に、住所を書き取った。そこまで、タクシーで来い、とだけ命じて、電話は切れた。酔っ払ったとは珍しい。大抵、俺の嫁は、下戸で通している。正体のない嫁を、変態親父のところへ放置するわけにもいかなくて、とりあえず、タクシーで、指定された場所まで出向いた。

到着して、リダイヤルで、変態親父を呼び出すと、マンションの名前と階数を告げてくるから、その通りに向かった。

「よおう、メロメロ小僧。」

「はあ？　俺の嫁は？　」

「寝室におる。こっちや、おまえ、メシ食ったか？　」

「食った。」

「みっちゃん、そのまま転がしたから、なんとかしといてくれ。」

「へ？　」

「わし、疲れたから寝る。腹減ったら、台所にあるもん食え。」

ただし、ここで、夫夫の営みとかおっぱじめるなっっ、と、釘だけ刺すと、堀内は、別の部屋に消えた。とても広いマンションで、客間があるらしい。その部屋の電気は、煌々とつけられていて、ワイシャツにネクタイをちょっと緩めただけの姿で、本当にベッドに転がされていた。

「・・・水都・・・・・・なんぼ飲んだんよ？　おまえ。」

普段から、あまり酒は飲まないのに、ここまで酔うなら相当、飲まされたに違いない。とりあえず、水を飲ませて酔いを醒ますほうがええやろう、と、台所からミネラルウォーターを取ってきて、口移しで飲ませた。一本丸々を飲み干して、ほけぇ、と、水都が目を開ける。

「・・・う？・・・・・・」

「寝とき、明日、ちゃんと聞くさかい。」

「・・・あ・・・・・・」

ああ？　と、思った瞬間に、ネクタイを掴まれた。

「・・・・どこ、行っとったんじゃっっ・・・・おまえ・・・・・」

「え？　東京やないか。」

「・・・嘘つけっっ・・・・ネタはあがっとんじゃっっ・・・・・吐けっっ。」

「せやから研修で東京やって。ヨッパライは寝ろ。」

「・・・ちゃうやろ？・・・おまえ・・・・腹・・・・あれ・・・・・」

「ハラ？　あーなんかわからんけど、俺が悪かった。話は明日。な？　明日しよ。」

宥めたものの、もう、何を言ってるのかわからないので、とりあえず、寝かせようとしたら、いきなり、ベッドへ押し倒された。それから、何かをブツブツと呟いて、俺のワイシャツのボタンを外そうとする。しかし、ヨッパライは、動きが鈍くて、ボタンが外れない。わたわたと暴れている俺の嫁は、完全に酔っ払っていた。それを冷静に眺めて、溜息を吐く。

・・・・・何をしてくれんねん、あのクソ親父ども・・・・・・

ここまで、見境をなくしている姿なんて、あまり拝めるものではない。だいたい、俺の嫁は、酔ってもほとほとと泣くとか、へらへらと笑っている位の穏やかなヨッパライだ。

「いてぇえええええええ」

考え事をしていたら、いきなり、ワイシャツの肩口に、俺の嫁は齧りついた。それも、力加減ナッシングだ。俺が痛がっているのを眺めて、今度は笑っている。どういう酔い方？　と、こっちが尋ねたくなる乱暴さだ。ヨッパライは、へらへら笑って、それから泣き出しそうに顔をくしゃりと歪めた。

「・・・・もっと・・・・痛かったやろ？・・・・・・」

「はあ？」

「・・・・なんで・・・・・嘘なんか・・・・・・」

「ついてへんっっ。ええ加減にせいよっっ、水都。」

「・・・・俺は・・・・おまえの嫁やのに・・・・・」

「うんうん、俺の嫁やな？　おまえ。」

「・・・・なんで・・・・ほんまのこと・・・・・言うてくれへんの？・・・・」

「だから、出張しとったってっっ。嘘ちゃうてっっ。」

「・・・・うそつき・・・・・」

「なんの妄想なんよ？　それは。」

「・・・・おまえ・・・うそつきや・・・・・」

「わかった。俺が悪かった。せやから寝よ。ごめんごめん、俺が悪かった。」

何やら責められているので、とりあえず、謝った。すると、へにゃりと崩れて、俺の上に落ちてくる。

「・・・・俺・・・・おまえがな・・・・あかんねん・・・・ほんで・・・・・・」

支離滅裂に喋っている口を塞いだら、酒臭かった。けど、無理矢理に、そのまま、俺の横に転がして暴れないように押さえつけたら、しばらくして、くたりと力が抜けた。へーへーと肩で息をしつつ起き上がったら、ズキズキと肩が痛んだ。ちょいと、そこを見たら、ワイシャツが赤く染まっていて、かなりびっくりした

11

さすがに、出張は疲れたのか、俺も、あの後、ぐっすりと眠った。明日は、休みだと思うと、気楽になる。

ごそごそという物音で、目が覚めたら、布団が引き剥がされていて、俺の足の間に、俺の嫁は座りこんでいた。

「・・・・みなと・・・・・ここでは、エッチ禁止・・・・・」

というか、そこまで切羽詰っているのか？　と、思いつつ眺めていたら、いきなりトランクスを下げられた。昨夜は、ドタバタで寝たから、とりあえず、スーツとパンツは脱いで、畳んでどけてある。つまり、ワイシャツにパン一という格好なわけで、無防備だ。

「なあ、みなと？」

トランクスは下げられたが、そこから攻撃されていない。ただ、じーっと、俺の嫁は、眺めているだけで動かない。いつから視姦プレイなんて覚えたんじゃ？　と、思っていたら、触られた。ただし、違うところだ。

「・・・・やっぱり・・・・・」

「ああ？」

がばりと顔を上げた俺の嫁は、物凄い形相になっていた。四つんばいで、俺の頭のほうへやってきて、ギロリと睨む。

「一昨年、おまえ、東京へ一週間、出張したよな？　」

「え？　えーえーえー、そんな古いこと覚えてないて。」

「あっこのキズな、盲腸ちゃうんか？　」

盲腸という言葉で、ようやく、俺の嫁が騒いでいる意味を理解した。一昨年、いきなり虫垂炎というものを患って緊急手術を受けたのだ。ただし、嫁には、「東京へ一週間出張」　ということにした。俺が弱っているのを見せると、いろいろ大変なので、そういうことにしたのだ。

・・・・・あーー、そうか、この間・・・・・・・

ストレス発散だと、嫁が襲ってきた。たぶん、あの時に気付いたかなんかして、この騒ぎになっているらしい。

「もうちょう？　おまえ・・・・あれは、だいぶ前に、風呂場で、風呂のフタに引っ掛けて切ったやつやぞ？　」

「嘘つけっっ。あんなに、くっきり残ってるのは、そんな浅いキズやあるかぁっっ。」

「今まで、見逃すほどのキズやんけっっ。」

「それは・・・・・とにかくっっ、なんで、そういうことを隠すんや？　」

「隠してない。怪我したんは、だいぶ前や。隠すも何も大したことあらへんっっ。」

「心配もしたあかんのか？　俺は、なんや？　深窓のご令嬢様か？　なんも知らんと微笑んどけてか？」

「・・・・深窓のご令嬢様は、朝っぱらから旦那のパンツ下げたりせぇーへんやろ？」

俺の嫁は些か壊れているので、世間一般奥様のような甲斐甲斐しさはない。それでも、嫁は嫁なりに、心配はしているらしい。

・・・・でも、こればっかりは言うわけにはいかんのよ・・・・・

だから、そのままだ。事実を言うつもりはないし、夫夫間に嘘をつかない、という約束を守るためにも、これは虫垂炎ではない、ということが、俺にとっての事実だ。

「花月っっ、俺、もう大丈夫やで？」

「うん、わかってる。」

「せやから、こういうことは・・・・」

「だから、ただの怪我やし、気付かれへんくらい細かいことや。・・・・・いちいち、そんなことまで報告せんとあかんのか？」

「ちゃうっっっ、これは盲腸っっ。」

「どこからの妄想じゃっっっ、うるさいわいっっっ。」

真剣に大声で怒鳴って、嫁を身体の上から退かせて起き上がった。

それから、隣に転がした嫁の顔を、今度は俺が睨みつける。

「当人の俺が、怪我やって言うてんのや。なんで、それが信じられへんっっ？　」

「・・・けど・・・」

「けどもクソもあるかいっっ。俺の言うことが信じられへんで、俺の嫁て言えるんかっっ。このバカっっ。」

水都の顔色が、さっと変わる。関西では、『あほ』はタダの接頭句だが、『バカ』は本気で罵る場合に使用する。つまり、俺は本気で、水都に、「脳なし」　と、罵ったということだ。

「バカやと？　事実歪めてるおまえんほうが、バカちゃうんか？　・・・もうええわ。気分悪い。」

言い捨てるとワイシャツのボタンを嵌めて、スーツとパンツをさっさかと身につけ始める。まあ、冷却期間は必要だろう、と、黙っていたら、いきなり、扉が開いて、堀内が怒鳴りこんできた。

「おまえらっっ、じゃかましいっんじゃあっっ。・・・・え？・・・・」

堀内の目には、服を身につけている浪速と、ベッドの上でワイシャツ以外はすっぽんぽんの吉本が居る。

「おっさん、俺、社長の話、受けてもええで。・・・・・こんな嘘つきと暮らすことあらへんからなっっ。」

「まだ、言うか？　バカ嫁。」

「おまえなんか離婚じゃっっ。盲腸なんか調べたら一目瞭然じゃっっ。」

「おー診断書提出したろやないか。」

吉本の余裕のある反応に、きっっと浪速のほうは目じりを吊り上げて、部屋を出て行く。その剣幕に、堀内のほうは慌てて浪速を追い駆けて出て行った。

やれやれ、と、吉本のほうは、大の字でベッドに倒れ込む。割りと水都は、カッとすると、極端な言動になる。「離婚」なん有り得ない。そんなものは、お互い、わかっていることだ。

・・・・あの調子では、今日はあかんな・・・・・・

あんなに怒っていたら、今日は顔も合わせてくれないだろう。それなら、ここで長居する用事もない。さっさと家に帰るに限る。もし、水都が、また忘れたら、また思い出させればいい。何度でも何度でも、思い出させて自分の傍にいさせる。そう決めているから、喧嘩しても構わない。

・

・

「みっちゃん、帰りよったぞ？　・・・・・・こらっっ、おまえの粗末なもんを見せるな。とりあえず、着替えろ。」

戻ってきた堀内は、すっかりと睡眠妨害の怒りは鎮まったのか、頭を掻いている。あんな怒り心頭の水都なんてものは、滅多に拝めないからだ。

「何をやったんや？　」

着替えてから、堀内に促されて居間に入った。インスタントのコーヒーを飲みながら、堀内が口を開く。口喧嘩くらいのことなら、からかいの対象になるが、「離婚」だの「バカ」だのという本気の罵りはいただけない。

「なんかの拍子に、一昨年の入院がバレたらしい。」

「げっっ。」

それで、そういうことかい、と、堀内も納得はした。入院するような病気に吉本が罹るなんてことは、本当に浪速にとっては危険なことで、忘れるなんていう簡単なことでは済まないリアクションが起こる。それを知っているから、堀内も、入院のことは伏せていたし、普段から、吉本の勤務状態もチェックしているのだ。

「ほんで、おまえは、どうするつもりや？　」

「俺は、盲腸の手術なんか受けてない、ということで、押し通す。それが事実や。俺は、一昨年、東京へ一週間の出張に出てた。そうやろ？　おっさん。」

「・・・・ああ、そうやったな・・・・・」

「ということで、俺、帰るわ。あの調子では、どうにもならんやろ

う。頭冷えたら帰ってくるか忘れよるやろうから、それから対処する。」

チェック頼むわ、と、素直に吉本も頭を下げる。これについては、堀内も茶化さないからだ。もちろん、堀内は深い溜息をついて、「わかった。」と、了承する。

12

今でも忘れられない言葉がある。

「おまえの猫は、大きい猫か、小さい猫か？　どっちや。」

「最後まで責任持って世話したれ。・・・・・そのために、やることは、どんなことでもやったらええ。」

たぶん、あのおっさんは、知ってたのではないかと思う。転属で、お互いにバラバラになって、おっさんは定年退職したけど、結局、最後まで、大きい猫のことは話せなかった。

たった三日間の事件だったが、あれで、俺は腹を括った。何があろうと、俺は健康で元気でいなくてはならない。最後まで面倒を看るために、それは必要不可欠で、そうでないと、あれは小さくなって消えてしまうからだ。

働き出して一年目、職場の駐車場で、俺は、トラックから荷物を運び出していた。何人かで、それを運んでいたわけだが、そこへ、同じ職場の公用車が突っ込んできた。完全な余所見運転だったので、俺と後二人が、撥ねられた。

ひとりは、鎖骨骨折、ひとりは、片足にヒビ、そして、俺は、頭を打って脳震盪で、ついでに頭を切ったから、俺が一番重傷だと思われた。

「検査入院に三日？　」

頭を打っているから、その検査に時間がかかると、脳震盪から意識が戻って、医者から申し渡された。明日、検査をするまで、なるべくベッドからも降りるな、と、注意もされた。けど、俺には同居している嫁がいて、帰れないなら、それを連絡しなければならない。といっても運ばれて来た時は、何も持ってなかったから、連絡しようにも金がない。

後から現れた、その当時の上司のおっさんに、金を貸してくれ、と、言ったら、理由を問われた。一人暮らしのはずの俺が家に連絡する必要はないからだ。

「ねっネコがおりますねん。」

「ネコ？　ほおう、ネコな。おまえの猫は、大きい猫か、小さい猫か？　どっちや。」

「大きい猫です。」

「・・・わかった・・・」

その当時、俺は携帯がなかったから、上司が携帯を貸してくれた。もちろん、その上司は、部屋から理由をつけて外してくれる。

「・・・水都？・・・・あのな、俺、ちょっと怪我してな。ほんで、検査とかなんとかで三日ほど入院やねん。別に、なんもあらへんねんよ。ただ検査があるから帰れへんだけや。・・・うん。着替え？・・・・病院ので間に合わすわ。・・・あー下着か・・・・せやな、それだけ頼んでもええか？　・・・うん・・・・うん・・・」

すぐに、水都が入用なものを運んでくれた。着替えとか保険証と

か、そういうものだ。後頭部を切ったので大袈裟に包帯が巻かれていて、びっくりしていたが、普通だった。

「どんくさいこっちゃ。」

「じゃかましいわ。」

「怪我は、切っただけか？」

「おう、これだけや。せやけど頭打ってるからな。検査せなあかんねんて。」

「ちょっと賢こうなるように改造してもらえ。」

「ははは・・・ほんまやなあ。」

びっくりはしたものの、気を取り直して、いつもの会話をして帰った。だから、俺も気にしていなかったが、三日して家に帰ったら、それは跡形もなく消えていた。そして、堀内のメモがあって、慌てて電話をしたら、凄まれた。

・　・　・

唐突に、無断欠勤なんてことがある。そういう場合は、倒れてい

ることが多いので、時間の都合をつけて、堀内は、浪速の住居へ顔を出した。玄関の扉に鍵もかかっていない。入り込んで、居間を覗いたら、やはり倒れていた。世話好きのバクダン小僧と同居して、倒れることもなくなっていたのに、これはどういうこっちゃ、と、堀内も首を傾げた。

「みっちゃん、どうした？　あほはどこや？」

ぐったりしている浪速を揺すったら、「消えるねん。」　と、呟いた。

「はあ？　何事や？　『消える』って、なんや？　」

「・・・・俺・・・・どんどん小さくなって・・・・消えるから・・・・・もうええねん・・・・・」

目が虚ろだし、ただごとではない。だが、別れた様子ではない。その部屋には、ふたり分の荷物がちゃんとある。何事かあったか、と、堀内が吉本の職場へ連絡すると、吉本は休んでいるという返事だ。

公用車で交通事故という事実を隠蔽するため、吉本たち怪我人は公休扱いになっていて、入院しているということは伏せられていたのだ。だから、部外者の堀内には入院の事実なんて教えられるはずがない。これでは埒が明かない。当人が携帯を持っていないから、どこにいるかがわからないので、仕方なく、電話機の横に、自分の携帯番号をメモして、戻ったら連絡するように書いておいた。

浪速の様子が常のダウンではないから、余計に心配した。三日して連絡がなければ、それから探すとしようと、浪速を会社の寮の空

き部屋に放り込んだ。けど、浪速は食事も水も自力では取らない。堀内が、箸で口元へ運ぶと無意識に食べるのだが、それ以外には手を出さない。どんどん、浪速はやつれるし、動きも鈍くなってくる。そろそろ医者に診せようか、と、思っていたら、ようやく当人から連絡が入った。

「交通事故？　・・・・なんでもええわ。戻ってるんやったら、こっちへ顔出せっっ。おまえよりみっちゃんが死にそうじゃっっ。」

事情は判明した。けど、これは、とんでもないと、堀内も思った。吉本が入院するような事態になると、それだけで耐えられなくなるということが、はっきりしたからだ。

「みっちゃん、あほ花月が迎えに来るで？　」

床に転がっている浪速の身体を、足で小突いて声をかけた。

「・・・・・花月・・・・・怪我したから・・・・・ほんで、俺・・・・だいぶ小さくなったから・・・・・」

「そんなことはあらへん。あほ花月は退院した。もう、どこへも行かへんわ。」

「・・・花月な・・・・ベッドから・・動いたらあかんねんて・・・・・せやから・・・帰られへん・・・」

自分の許へ帰ってこないという事実だけで、こうなるのだとしたら、無理に引き剥がすことはできないだろう。というか、そこまで根付いてしまった存在は、とても厄介なものだ。存在がなければ、消滅を選ぶなんて、とんでもない。

・　　・
・

やってきた吉本は、まだ痛々しい包帯姿だったが、それを外させた。兎に角、怪我したことも、入院したことも浪速の前ではなかったことにしようと、堀内が説明した。

「消えるって言うんや。・・・・・おまえ、何があっても、みっちゃんの前から消えるなよ。消えるなら、先にわしに連絡してこい。最後まで責任持って世話したれ。・・・・・そのために、やることは、どんなことでもやったらええ。」

堀内にしても、そうするしかないのは、わかったから、そう提案した。もちろん、花月も、扉から覗いた浪速の様子に、愕然とした。自分が、検査で入院しただけで、こんなことが起こるというのなら、入院なんてできるわけがない。

・・・それほどなんかい、おまえん中の俺は・・・・・

嬉しいと思う反面、それしかない水都が憐れだとも思った。壊れていて、大切なものを作らなかった水都に、大切なものを作った。その責任は、水都が息を引き取る瞬間まで、花月が背負うものだ。他の誰かではない。花月にしか取れないものだった。

後頭部のキズを見せないように、ゆっくりと水都に近寄って起こして抱き締めた。

「かげつ？　」

「うん、ただいま、俺の嫁。遅なってすまん。・・・・・・家に帰って、メシ食うか？」

抱き締めた身体は、小刻みに揺れて、「お粥さんがええな。」と、笑って、花月の背中に手が添えられた。

13

午後早くに、家に辿り着いた。一日ぐらいの出張だと、これといって片付けるものもない。レポートを書かなければならないから、とりあえず、やるか、と、着替えて、こたつに座りこんだ。

「しもたなーーあいつの洗濯物回収してきたら、よかった。」

うっかりしていたが、あちらは一週間だから、洗濯物も一気に出されたら大量だ。四日分だけでも回収してくれれば、よかったことに、今更ながらに気付いた。とはいうものの、あんな状態では、部屋にも入れてくれないだろうし、携帯からの連絡にも出ないから、無理やったな、と、ひとりで結論して笑った。

・

窓の外は、暖かい日差しがあって、初冬という時期にしては温かい。十年前の入院騒動に記憶を巡らせた。

水都は、おかしくはなっていたが、まあ、生きていた。ただし、しばらくは離れるのも嫌がった。職場へ顔を出す必要はあるし、何かと後始末だってある。けど、どこかを掴んで離さない壊れた水都を一人にしておけない。

「結果は、どうやった？　」

「なんもなかったです。・・・・・ただ、その・・・・・ちょっと・・・・・」

電話をかけて、二、三日の休みを貰うのに、理由が言えなかった。まさか、嫁が本格的に壊れまして・・・・なんて言えない。検査の結果は問題なしだから、これも理由にできない。さて、なんと説明するか、と、思っていたら、上司のおっさんは、くくくくく・・・・と忍び笑いを漏らした。

「大きなネコが、離してくれへんのか？」

「・・・・ええ・・・・」

「今週一杯は休んだらええ。おまえの格好は目立つからな。そういうことにしといたら、問題はない。公休になるようにしといてやるから、今度、奢れ。」

これと言って説明しなくても、上司のおっさんは、理解してくれた。違う意味で言ったのだろうが、内容は同じことだ。一週間近く、べったりと、水都はくっついていた。いつもの言動が復活するまで、俺も傍に居た。身体を重ねるようなことではなくて、存在を感じさせてやりたかった。いや、もちろん、身体も直接触れたけど、それだけではない。喋らない水都は本当にネコみたいなもので、ただ傍にいる。たまに、触れて、たまに、会話して、ただ一緒に居た。

一週間する前に、起きられないほどの無茶をしたら、それから、いつもの状態に戻った。そのことも、きっぱりと忘れているらしく、ぐちぐちと文句を言った。

だから、入院は避けている。というか、しない方向で生きている。健康であれば問題はない。無茶に身体を壊すような仕事もない部署にいる。出世するには、マイナスだが、別に、出世に興味もない。元上司のおっさんも、そういう人間だったから、気楽にして定年ま

で働いていた。

「俺の真似はせんでもええんやぞ？」

と、上司のおっさんは言っていたが、真似させてもらおうと思う。もちろん、年度末とか会計監査とかの時は、猛烈に忙しくはなるが、一時のことだ。

その当時のことを思い出して、笑ってしまった。

「大きいネコで、どうしようもないほどおもろいネコですわ。・・・・ほんで、あんたが予想していたのと違う雄ネコです。びっくりやろ？」

定年退職してから逢っていない元上司を思い浮かべて、呟いた。あれから、何度も喧嘩して、忘れられて、壊れて、いろんなことを経験したが、それでも離れることがない。もう、これでええんやろうと思っている。

「しかし、怒るとはな・・・・・ちょっとは、まともになっとるやんけ。」

今朝の怒り状態を思い出して、また笑った。心配ぐらいさせろ、と、怒鳴ったのは、いい傾向だ。

・・・・風邪ひくぐらいのことやったら、俺も看病してもらうけどな。入院はまずいんやろう。でも、怒ったってことは、それを聞かされても怖いというのとは違うんかな？・・・・・・・

いや、油断はできない。以前の時も、最初は平静だったからだ。

あそこから、どう変化するのかが、十年しても、いまいち分からない。人生の投げ遣り度が、アップするとか、忘れるとか、いろんな変化をするのだが、その引き金と、変化の度合いというのが、俺にもよくわからない。壊れているから方式がないのかもしれない。

「まあええさ。十年もしたら、ズル休みの方法も、介護の仕方も、だいぶ慣れてきた。とりあえず、三日ほどしたら迎えに行こうやないか。」

うーんと伸びをして、バタンと寝転んだ。まだ、明日も休日だ。時間は。山ほどある。とりあえず、昼寝して、それから、レポートを書くことにした。

・

・

土日は、ビジホのベッドに転がっていた。怒りは収まらない。嘘はつかないという約束を破った旦那が、ものすごくムカついた。

別に、看病ぐらいするし、心配もさせろ、と、俺は言いたい。俺の死に水を取ると約束したのだから、それまでの時間は、俺が世話することだってある。

・・・・・けど・・・・・もし、花月が治らへん病気とかなったら、自信ないな・・・・・・

俺の末期の水を飲ませてくれるはずの旦那に、俺が、それをしてやることになったら、神経が保つかどうか、かなり怪しい。でも、それをしてやれるのが、俺だけなのも事実やろう。

・・・・やるけどさ。その後、もう、どうでもよくなって、後追っても叱らんとってや？・・・・

そんなことばかり思い浮かんで、とてもブルーな週末だった。

謝れというのも違う。もう一度、約束するのも変や、けと〝、何か言葉は欲しい。だが、顔を見たら怒鳴りそうで、合わせづらい。

「・・・・花月・・・・なんで、嘘なんかつくんよ・・・・」

はあ、と、溜息をついて、目を窓へやる。とても温かい日差しが、あって、初冬なのに温かそうだ。本当なら、この好天にドライブしているはずだった。それもこれも、あいつが、嘘つきなのが悪い、と、ムカムカしつつ空を眺めた。

14

忘れてもらえない、ということに、酷く侘しいものを感じた。本来は、忘れてくれないことを喜ぶものだが、浪速に関しては違う。

何度も、旦那を忘れている。だが、日常業務で、そんなことは、まったくわからない。自分たち会社の人間は、けっして忘れないからだ。大切なものを失うとかなくすとかした場合、それを忘れてしまおうと、人間は努力する。努力しても忘れられるものではない。そう普通の人間ならば、だ。しかし、浪速は、見事な程に、自分の記憶から消し去るという特技がある。

何度か、その現場を目撃している堀内は、あまりの忘れっぷりに驚愕した。名前も同居していた事実も、綺麗さっぱりと忘れるからだ。

「しゃーないやろ？　こいつ、神経が繊細にできたぁーるんやからさ。・・・・まあ、忘れても思い出させるから、かまへんねんよ。」

その旦那の吉本のほうは、忘れられたという事実に苦笑はするものの、別に悲しそうではない。ちゃんと、すぐに思い出させて元に戻している。戻せると確信しているからの余裕というものだ。

大切で、ないと精神的に辛いものだから、浪速は、それを忘れる。なくては生きていけないのだと、その度に告白するような行為だ。ただし、これは吉本限定でもある。浪速は、生きているために金が必要だと、身体にも心にも染みついているから、働く場所は忘れないし、その職場の人間も、絶対に忘れない。いつものように、働いているから、肝心なことを忘れているという事実さえ、気付かない

のだ。

・・・・つまりや、あいつがおらんくなったら、忘れんと生きていけへんというのは、あのクソガキだけっちゅーこっちゃ・・・・・・

それが、かなり侘しい。なんせ、付き合いからすれば、堀内のほうが吉本より何年も長いのに、そういう繋がりがないのだ。堀内のことを浪速は忘れたことはない。働く為に、とりあえず、生きているために必要な知識として、残っているらしい。

今も、目の前で、パソコンの画面を睨んでいる浪速がいる。さっきまで、中部の統括部長を名指しで呼び出して、個人的支払を会社に押しつけるな、と、怒鳴っていた。ついでに、総務部長も並べて、「総務部長なら、こんなもの、突っぱねろやっっ。」と、大声で恫喝していた。あまりの剣幕に、統括部長も総務部長も気迫負けして、ぺこぺこと平謝りしていた。

さすがに、これは、まずかろうと、総務の人間が、堀内に連絡してきたので、その騒ぎは収まった。というか、勝手に、調べ上げた統括部長の個人的支払は、貸付金処理をさせてしまったらしい。もちろん、本来は、それで正解だ。間違っていない。

「みっちゃん、休憩しようか？」

「勝手に行け。・・・・せやせや、おっさんを一々呼び出すのは、面倒やから、おっさんの職権を使えるようにしといてくれ。ほんなら、もう呼び出しもかかれへんわ。」

大変、機嫌が悪い。それは、初日から、そうだから、もう、一々気にしないが、不機嫌の理由は変わったのではないかと思う。

「なんで、そんなに機嫌悪いんや？　わしにまで噛みついてどーすんのや？　わしは、おまえの飼い主やぞ？　」

「・・・・うるさいわいっっ・・・・・愛人やねんやったら、俺に愛人らしいことでもさせろや。」

「ん？　何してくれはるんでっか？　水都さん。」

「なんでもしたるで。出血大サービスでな。」

「それは、あれか？　あほと別れるっちゅーことか？　」

「はあ？　そんなんちゃう。」

ならば、その愛人らしい行いというのは、立派な浮気に該当するのではないだろうか、と、堀内は頬を歪める。たぶん、言ってる本人には自覚はないだろう。まだ、忘れているというわけではないらしい。

「あほ花月と、なんの喧嘩や？　」

「・・・・うそついた・・・・」

「それだけか？　」

「俺には重要や。嘘ついた内容が、ムカつくんじゃっっ。」

べしべしと、乱暴にキーボードを叩いている浪速は、本当に怒っている。大概に愛想の欠片もない小僧が、こんなに表情に出してい

るのは珍しい。まあ、それほどに、あのあほに怒っているということだろう。今回は忘れないらしい。

「そろそろ監査も、目処はついたか？」

「一応、過去半年については、だいたい目は通した。付箋はつけてある。」

「ほなら、明日くらい帰るか？」

帰れ、と、言ったら、微妙な顔をした。それから、すぐに、表情を消す。

「こっちで働くのでも、かまへんで？　引越しとか、業者のお任せパック使うてええならな。」

「はあ？　おまえ、何言うてんのや？　その件は、わしが反対。」

そこまで、言うと、堀内は沈黙して、部屋の周囲を見渡して、浪速の耳元へ顔を寄せた。沢野と意見が折り合っていない部分を、浪速に告げておくことにした。

「わしは、いずれ、関西へ本社を動かすつもりをしてる。沢野は、このまんまでええと思ってるんやが、わしは、それには反対や。ここでは、合併した会社の色が濃すぎて、動きにくいからな。・・・・・・せやから、おまえは、いずれ、本社になる関西を抑えてもらいたい。」

「それまで、俺がおったらな。」

「おるやろう。そう時間かけるつもりはないで？　次の合併で、株式のほうを操作する。徐々に変えていくつもりや。」

「また、えげつないことするもりなんやな？　おっさん。」

「・・・まあな・・・・」

まるで、睦事のように顔を寄せて話し合っているが、内容はかけ離れている。だが、内密な話なので、このままだ。

「・・・俺・・・今、帰りたない・・・・」

「わしのマンションにおるか？　」

「いや、それ、意味ないから。」

「なんでや？　」

「ようわからへんねんけど、ムカつくからな。・・・・ものすごくムカついてるから、絶対、また喧嘩になる。・・・・あんま、意味ないやろ？　」

「おまえが、たまには折れたったら、どないなんや。」

「そうやないねん。・・・・嘘つかれたのが、ムカつくんや。また、あいつ、同じことする。そこまで、俺は信用がないんやろうか、と、悲しいわけよ。」

事実を知らない浪速にしたら、そういうことになるだろう。入院しているなら、世話ぐらいさせろ、と、思っているのだろう。だが、

それは違う。

ぐいっと浪速のネクタイを引っ張って、顔をさらに近付けた。

「みっちゃん、それは違う。・・・・・そうやない。」

「ん？　」

「あいつが嘘やないって言うんなら、嘘やない。それが、事実でなくても、事実になる。・・・・・おまえ、あれと別れて暮らせるか？　つきつめて考えてみ？　あれと暮らす上で、あいつが、おまえの不利になるようなことしたことあるか？　あらへんやろ？　つまり、あいつは、何かしら理由があって、そういうことにしときたいってことや。・・・・・わかるか？　」

「珍しいな、おっさんが、あのあほを庇うんか？　」

「わし、おまえが壊れてんのを看るのは、勘弁や。・・・・あいつの真似は誰にもできひん。」

「せやろな。俺も、それは思うわ。」

「そしたら、帰れ。」

「・・・まだ、いやや・・・・・」

「この頑固モンっっ。・・・・まあ、ええわ。もうちょっと、遊んどけ。とりあえず、メシ。」

「まだ、言うか？　」

「愛人やったら、パパの言うことは聞け。」

「しゃーないのー。ん？　あれ、総務部長いやはったんですか？」

ふたりして視線を戻したら、会議室の扉が開いていて、総務部長が。声をかけあぐねていた。食事をどうするか、尋ねに来たのだろう。

顔を赤くして、しどろもどろで弁明しているのだが、堀内も浪速も、なんのこっちゃろ？　と、首を傾げていたりする。付き合いが長くなってくると、もう、こんなスキンシップぐらいでたじろがない。

「ああ、すまんことですな、溝上さん。・・・・ちょっと働きすぎやさかい連れ出しますわ。」

「そっそういうことなら、ええ、ゆっくりしてきてください。・・・・・・浪速君、さっきはありがとう。どうしても、親族さん方には強く言い出せなくて困ってたんだ。」

「はあ、まあ、よろしいで。俺、そういう悪役をやらんとあかんらしいですから。」

別に恥ずかしがる素振りもなく、システムを落としている浪速と、「いや、まあ、可愛いてしゃーないんですわ。」　と、笑い飛ばしている堀内を眺めて、溝上も作り笑いを浮かべる。

浪速は、あれが、誤解をされるものだと気付いていないし、それ

よりも、堀内の言った意味のほうを考えている。「事実でなくても事実になる。」　ということは、何か、自分のほうにあるのだろか、と、思い浮かべているのだが、その記憶事体を自分で抹消しているから、とんと思いつかない。

15

堀内に連れ出されて、ファミレスの日替わり定食を食べさせられた。適当に箸はつけたがっているのだが、別に、それはどうでも良かった。

考えているのは、事実がなくても事実になる、という言葉だ。これ、単純に言えば、「嘘をついても、嘘じゃないと言い張ればほんま」　なんて、とんでもない結論になるのだが、そういう意味で堀内は言ったのではないだろう。

・・・・・俺、壊れてる時に、なんかやってるんやろうな・・・・・・

完全に花月を忘れることがある。その状態になっている場合、仕事に関しては記憶に残っているが、日常的なことは、まったく覚えていない。というか、覚える必要がないから、覚えていないのだ。毎日の繰り返しは、これといって変化するものではない。誰かをひっかけて、一夜を過ごしたり、その相手と結婚の約束をしたり、そういう日常は、俺にとって、なんの変化もないものだ。

・・・・・忘れてる中に、なんかあって、俺を、それから遠去けようとしてる？　・・・・・

そのために、嘘をついて、それを事実だと摺り返しているのだとしたら、俺には、何も言えない。

・・・・けど、俺は、世話されるばっかりの状態で、あいつばっかりが負担が大きいってのが、許されへんのよ。・・・・・

そのために、花月が無茶をしてるとしたら、俺は、やっぱり遣り切れない気分になる。盲腸炎で入院して、そのまんま、日常に戻っているとしら、相当、身体には負担があるだろう。そういう時くらい、俺がフォローしたいと思うのは、おかしなことではない。

・・・・・けど、それで、なんかあるから、こうなっとると・・・・・・・ほんなら、どうよ？・・・・・

もし、その世話をしている時に、俺自身が、何かを起こしているのだとしたら、そのほうが、花月には負担になっているのかもしれない。

自分のことだが、覚えていない。それが一番のネックだ。

・

ぺしっ

・

考え込んでいたら、いきなり頭を叩かれた。すでに立ち上がっている堀内のおっさんがいる。

「わし、予定があるから、そろそろ出るぞ？　おまえは、どーするんや？　」

「仕事する。」

「粗方終わったんとちゃうんか？　」

「片付けとかなあかんし、総務のおっさんに、ちゃんとした証拠を渡しといたらんとあかんねやろ？」

「ああ、溝上に説明しといてくれ。・・・・それから、報告書も書いてくれると、なお有難い。」

「わかった。」

「ただし、期限は明日まで。ずるずると本社に居座るつもりやったら、あかんからな。」

「ちっっ、痛いとこを。」

俺が立ち上がると、堀内のおっさんは、レジへ向かう。徒歩で来たから、本社は、すぐそこだ。そのまま、おっさんは放置して帰ろうとしたら、後から追いついてきた。

「明後日には何があろうと新幹線に乗せる。そのつもりでおれ。」

「有給もろて、ちょっと遊んでいこかな。」

「・・・・・・どあほ・・・・・・わしが働いてんのに、おまえに有給なんかあるかいっっ。」

今度は本格的に殴られた。つまり、どう足掻こうと、明後日には帰らされるらしい。別に、家に帰らなくてはならないということはない。向こうへ戻ったら、適当にビジホへ逃げ込んでも問題なんてないのだ。どういう結論か、まだ見えないが、とりあえず、それを考える時間が必要だ。

・

午後から、報告書の作成をした。かなり膨大なことになるので、時間がかかる。中部と東海の問題のある店舗について、ひとつずつ報告しなければならないからだ。

「ご苦労様。」

声が聞こえたので、顔を上げたら、社長と副社長が並んでいた。時間がかかるんやったら、面倒やな、と、思いつつ、とりあえず挨拶をする。

「その報告書についてなんだが、少し外して欲しい店舗があるんだが、いいだろうか？」

副社長が、そう切り出した。まあ、そら、そうやろう、明け透けに報告されたら、悪事モロバレの事態だ。

「申し訳ありませんが、俺は、専務と常務から報告書の提出を求められているので、そちらの意見は聞けません。・・・・・そういうことは、直接、専務か常務に言ってもらえますか？」

「いや、タダというわけじゃない。何がしかのことは・・・・」

「金？　俺、金には不自由してませんのや。」

なんなら、クビでもよろしいで？　と、鼻で笑ったら、副社長の顔色が変わった。このふたりの関係する店舗が、いくつあるか知らない。そういう事前情報すら寄越さなかったところをみると、沢野

は、本気で親族経営の膿を出したいのだろう。それに加担するつもりはない。言われたから、俺はやっているだけだ。

「たかだか、愛人の分際で。」

乱暴に、使っていたサーバーを副社長は床へ叩き落とした。ＬＡＮ回線の配線も引きちぎる。けど、そんなもので、事実は消えない。報告書は、ひとつずつ、作った順番に堀内のメールアドレスへ送っている。まだ、三分の一だが、証拠は、俺の脳味噌にも記憶されている。これを壊さなければ、事実は消えない。

ふんっっと鼻息も荒く、二人は部屋から出て行く。さて、新しいパソコンを用意してもらおうか、と、思っていたら、総務の溝上が慌ててやってきた。

「総務部長、新しいの一台貸してもらえませんか？　」

「いや、もういいです。」

「そうですか。ほんなら、口頭で説明しましょうか？　」

「それも結構です。そろそろ、関西へ帰られたらいかがですか？　」

朝とは打って変わった態度になっていた。なんかあったのだろう。会社勤めをしていると、理不尽なオーダーも入ってくる。分かりやすい改竄であっても、上から、そう指示されたら、それに従うほかはないからだ。

・・・・・親がカラスを白といえば、白・・・・・か・・・・・

溝上も、そういうことになったのだろう。

「パソコンも貸してもらえませんか？　」

「はあ、まあ。」

「分かりました。ほな、手書きしますわ。」

そこいらにあるレポート用紙を手にして、とりあえず、他の店舗の報告書を書く。全店舗ではなくて、問題のある店舗だけだから、数は、それほどではない。ここにある資料さえ運ばれなければ問題はない。面倒なので、店舗ごとに要点を纏め、証拠になる資料をコピーで添付して、同様のタイプのもの同士で纏めておいた。

その日、堀内も沢野も現れなかったので、深夜までかかって報告書は仕上げた。コピーを何部か作り、それらを手にしてビジホに戻った。

別れることになったら、俺は、こっちに転勤なんかな、と、思いつつ、携帯を眺めた。着信履歴は、まったくない。

・・・・・別れたら、楽やろうな。けど、楽しいことは、ひとつもあらへんわ・・・・・・・

「事実でなくても、事実になる」

それは、花月が吐く言葉を、全部鵜呑みにするということだ。そんなこととしたくない。けど、それで、何かを花月が、俺から遠去けているとしたら・・・・・そう考えつつ、ベッドに転がる。

・・・・なあ、花月・・・・・俺、それほど迷惑かけとんのか？
それで、おまえ、幸せなんか？　・・・・・・・
たぶん、あのアホは、「幸せや。」　と、笑うだろう。それがわかるから、離れたくない。

16

翌日、資料を手にして出社しようとしたら、ビジホの玄関で、堀内に捕まった。そのまま、沢野のクルマに押し込められた。

「やっぱり、みっちゃんは賢いわ。おっちゃん、大助かりや。」

浪速の持っていた資料に、ざっと目を通して、沢野はニコニコと笑っている。もう、今日は帰ってもええからな、と、沢野は、そのまま、ビジホのチェックアウトをしてくるように命じる。沢野の秘書が同伴して、支払のほうは済ませてくる手はずだ。

資料を手にして、沢野と堀内は、そのクルマの横に並んで立っている。車内には、運転手がいるから、外へ出た。

「堀内、わし、みっちゃん送ってくるさかい、おまえ、荷物を確認してきてくれるか？」

「え？　わし？」

「確認したら、どこぞへ雲隠れしといたらええ。」

くくくくく・・・・・と、沢野は人の悪い微笑を堀内に向ける。

「・・・・ったく、容赦のない。局へタレこむとは、えげつない。」

今日の午後、もしくは、明日の朝一番に、国税局の査察が、沢野たちの会社に入る。こっそりタレこんだのは、沢野だ。昨夜、浪速が帰ってから、社長の息のかかった人間が、そこにあった書類を運

び出した。かなりの山奥で廃棄したのだが、沢野は、それを、きっちりと回収させてきた。それは、現在、その回収した便利屋が預かっているので、中身の確認をしなくてはならない。堀内に、その仕事は任せると命じたわけだ。

半年前から遡ること六か月分の書類の紛失と、役員や幹部たちの個人的支払の立替、金品のちょろまかし、などを、国税局へ匿名でタレこみ、多少の資料もつけておいた。それらが動き出す情報が流れたから、浪速に、本社を引っ掻き回させて、証拠もきっちりと掴んだ。

「おまえは、甘い。・・・・これで、あいつらの膿っちゅーか、溜め込んでたもんは、全部出る。お陰で、来期は、赤字になるやろう。どうや？　堀内、これで株は動かしやすくなったやろ？　」

「やることがえげつないを通り越して悪辣や。」

会社の資産を吐き出させることによって、会社の価値は、かなり下がる。そうなれば、株も安く買い叩けるという算段だ。体力がなくなった会社ではあるが、二、三年我慢すれば、それだって回収は容易い。金食い虫を一掃することができるからだ。

「ほほほほ・・・・緊急動議をかけられたなかったら、社長も株を動かすわ。おまえみたいに合併の度に、ちまちま株を操作しとったら何年かかるやわからへん。」

もちろん、社長や幹部たちが公金横領している証拠も、手元にある。これを、弁護士につきつけさせる、と、言えば、大人しく株の譲渡にも応じるしかない。特別背任罪で告訴されたら、社長と言えど、クビになるからだ。

「ほんで、あんたは左団扇か？　」

「そらそやろう。わしは常務。おまえより位は低い平取と同じや。」

最初から、沢野がその地位を請うたのは、こういうためでもあった。外部から見れば、沢野は、ただの閑職だと思われる。今回、査察が入っても、「わしは、ただのヒラ」で、押し通すつもりだったし、関西で雲隠れするつもりだった。実質の経営に参加していないものばかりで、査察に来る百戦錬磨の猛者の相手はできない。確実に、ミスをやらかして、税金をごっそりと追徴されるはずだ。

それらを、全部、計算して、沢野は、浪速を呼んだ。これを送り返すのに、沢野と堀内も一緒に帰京した、という理由も成り立つから、不在の理由にもなる。

「確認してから、一緒に帰ったらよろしいやろう。わしも同席しとる手はずですんやから。」

浪速を呼び出す前に、話だけは聞いていた堀内は、はみごにせんとってくれ、と、苦笑する。このえげつない沢野の行動力と計画性というものには、脱帽するしかない。水都は、事情も知らずに、いいように利用されているのに、気付かないほど手際がいいのだ。

「しゃーないなあ。ほな、どっかで・・・・・・せやせや、星ヶ丘の動物園はどうや？　」

「なんで、そないなとこ。」

「ははは・・・・・みっちゃんにコアラ見せたなったから。」

「はあ、さいですか。ほな、ちょっと行ってきます。」

堀内が、その場を離れて、タクシーを拾った。沢野のクルマには運転手がついている。だから、その場所へ出向くわけにはいかないからだ。たぶん、また浪速を山車にするつもりなのだろう。沢野が動かない分、堀内が動く。ここいらは、長年の仕事の付き合いで、阿吽の呼吸だ。

・

「あれ？　堀内のおっさんは？　」

ようやく、荷物を運んできた浪速が、声を出す。

「堀内は、ちょっと野暮用や。さあ、みっちゃん、お仕事終わったから、沢野のおっちゃんと遊ぼうな。コアラ見ような？　」

「こあら？　」

「そうそう、近くに動物園があるんよ。ゆっくり、散策してお昼はヒツマブシにしよか？」

「ああ？　わけわからんこと言うてんと、仕事せいよ、おっさん。」

「今日はええねん。みっちゃんを送ったる予定しかあらへんのや。せやから、おっちゃんと目一杯遊ぼうな。」

あはははは・・・・と、沢野は大笑いしている。また、このおっさんは・・・・と、浪速のほうは呆れている。唐突に連れ出される

のは、沢野に関しては毎度のことだ。だから、もう付き合うしかないこともわかっている。

「おまえ、今日はええわ。本社へ戻ってくれるか？　そうでないと、堀内が、トランクになるさかいな。」

一緒に戻ってきた秘書に、そう命じることを忘れない。堀内までもが帰京する理由は、もちろん、浪速という愛人と過ごすためだと思われている。だから、同乗すると言ってもおかしなことではない。トランクに浪速の荷物を放り込んで、沢野は、「星ヶ丘」　と、行き先を運転手に告げる。堀内の愛人だから、沢野も可愛がっているのだと、運転手も秘書も誤解しているだろう。

・・・・実際は、堀内と同じらいに貴重なコマやから大切に扱ってるだけなんやけどなあ・・・・・・

「動物園にコアラがおるんよ。だっこさせてもらおうか？　」

「はあ？　いらんっっ。ていうか、あんた、ほんまに仕事せいよ。」

「あはははは・・・・たまには、休まんとな。おっちゃん、もう年やさかい無茶できへんねん。」

ほんまに、もう・・・と、浪速は呆れて口を噤む。こうなってると、もう勝てない。どうやら、またクルマで送られるのだと理解して、内心で大きな溜息をひとつついている。

17

何かを反論する前に、堀内にハイツの階段を登らせられた。沢野のクルマは、そのまま走り去った様子だ。ピンポンラリーに反応して扉が開くと、堀内が俺の荷物を、まず、玄関へ投げ入れる。

「返品。」

「はあ？　返却の間違いやろ？　」

「どうでもええわ。メシは食わせてあるからな。」

そういう遣り取りの後で、掴まれていた腕を、前へ突き出させて、花月の温度に変わった。

「おかえり、水都。お疲れやったな？　」

にっこりと微笑んでいる俺の旦那は、四日前とは、まったく違う顔だった。また、俺が忘れているとでも思っているのだろう。

堀内のほうは、カンカンと足音を響かせて、ハイツの階段を降りて行く。しばらくは関西に居るから、と、沢野共々の予定は教えられた。だから、関西統括のほうも、堀内がしばらく捌くらしい。俺には、これから三日の休みをくれた。

「ほんまに、お腹は空いてへんのか？　」

ずるずると、そのまま玄関へ引き入れられて、声を掛けられた。喋らない俺に、別に焦ることもなく、俺の旦那は、俺の靴を脱がせ

ている。

「はい、足あげて。」

旦那の後頭部を眺めつつ、今まで考えていたことを思い返して、それから、ちょっと笑った。いろんなことを考えて、距離を空けて突き詰めて考えようとしたことなんて、旦那の姿に比べたら些細なことだと思えた。

嘘をつかれた。

それに腹を立てた。

約束したのに破った。

それが悲しかった。

けど、そのどれもが、俺のためであるのは、間違いのないことで、花月が、得することなんてないのだ。俺がおかしくなるから、入院したことを出張だと言い張るのだとしたら、俺は、それを出張だと肯定するべきなのも、わかっている。

・

・・・・・何より、俺・・・・この体温がないと、あかんわ・・・・・

・

足を上げるのに、旦那の肩に手を置いた。その体温があれば、今

まで怒っていたことすら、どうでもよくなった。

「はい、終わり。ほれ、風呂に入れ。疲れたやろ？」

また、手を引かれて、居間へ誘導される。そこで、スーツとかワイシャツとかネクタイを脱がされる。まるで、子供のように世話されているのだが、その世話している旦那が、大変嬉しそうなので、こちらも頬が歪んでくる。

「ん？　なんか、ええことあったか？」

「・・・・・花月・・・・・・・」

「ん？」

「・・・ただいま・・・・・・」

「おう、おかえり。風呂入り。」

「・・・・うん・・・・」

また、風呂場に誘導された。ぽちゃんと湯船に浸かるのを確認すると、また、旦那はへらっと笑っている。

「なに？」

「いや、俺、かなり、おまえに依存してるらしいわ。おまえが居てないと、どうも調子が狂うんや。・・・・・あんま、出張とかせんといてくれな。」

「うん。」

パタンと閉まった風呂の扉に、俺は笑った。依存しているのは、俺のほうだ。どこの世界に、三十を越えたくせに、靴を脱がせてもらうあほがおるんや？　食事も着替えも、なんだかんだと世話を焼かれているのは、俺のほうなのに、俺の旦那は、それがないと調子が狂うなんて、おかしなことをいう。

・・・・・ほんま、おまえは、おかしなヤツやわ・・・・・・・・

俺みたいなおかしな人間の相手ができるのだから、あのマトモそうな俺の旦那も、どこか壊れているのかもしれない。壊れたもの同士で、協力して生きているのだとしたら、それは至極マトモな行いだと思う。というか、俺は、あの体温がある限り、楽しく生きて居られるのだと思う。

「事実でなくても事実になる。」

壊れているから、事実がわからなくても、相手の言葉だけを信じようとすればいいのだろう。いや、実際は、そうはいかないが、今度のことは、そういうことで片付けなければならない。と。うしたって、俺は、旦那が居ないと困るのだから。

今日、顔を合わせて、そう思った。それが一番大切なことだ。

「おまえっっ、また沈没しとるんかいっっ。・・・・ったく、世話の焼ける。」

乱暴に扉が開いて、花月が飛び込んでくる。考え事をしていたつもりだったのだが、どうやら居眠りこいてたらしい。目は閉じたま

ま、湯船から引き摺り出そうとしている花月の首に腕を回した。

「なんや？　」

「花月、俺、三日間休み。」

「うん、ほんで？　」

「せやから、無茶してもええで？　」

「さよか、ほんなら、キレイキレイしてから、がんがん攻めたるわ。覚悟しとき。」

「うん。・・・・あのな・・・・」

「おう。」

「俺、看病できるから。」

「ああ、俺が具合が悪なったら頼むわな？　」

とりあえず、言いたいことは言った。たぶん、通じていないだろうが、それでもいい。もし、俺の旦那が入院するような事態に陥ったら、次からは、ちゃんとしてみせると決意した。できるのかどうか、よくわからないが、とりあえず、旦那の顔だけは、毎日、拝みにいきたいことだけは、告げようと思う。

「大丈夫や。俺、健康やから、インフルエンザぐらいしかあらへん。」

俺が思っていることが、わかっているのか、旦那は、そう声をかける。まあ、この至極健康体の男が患うものなんて、そんなものだろう。

「ちゃんと面倒看るわな。」

「うん、俺もちゃんと看るで。」

あれほどの口喧嘩をしたはずなのに、なんだか、よくわからないうちに解消していた。翌日、俺は、寝たきり老人状態で、ベッドに転がっていたのは、言うまでもない。

18

翌日、腰から下の感覚がない俺の嫁は、ぐったりと寝込んでいる。朝焼けの時間まで離さなかったので、俺も、かなり寝不足だ。時刻は、九時を少し回っている。こっそりと起き上がって、部屋から出た。携帯で、職場へ連絡を入れた。

「ええ・・・今も、トイレですねん。昨日、なんか当たったらしくて・・・はい・・・すんません。」

サボりの理由なんて、いくらでもある。それほど忙しい時期でもないから、うちの課長も気楽なものだ。もちろん、具合は本当に悪い。ただの寝不足やけどな。

連絡だけ入れたら、さっさとベッドに引き返した。どう考えても、俺の嫁は午後まで目覚めないだろう。それなら、俺もご相伴で、朝寝を楽しむことにした。

「・・・・ん？・・・・つめた・・・」

「ああ、すまん。トイレ行ってた。」

「・・・・うー・・・・・」

「うん、寝よう。どっこも行かへんからな。俺は、ずっとおるから。」

ぎゅっとしたら、うーと唸って、俺の嫁は、すうすうと寝息に戻る。忘れたのか、どうなのか、よくわからなかったが、まあ、一昨

年の出張は、片が着いたと思われた。堀内のおっさんが、連れて来たのが、ちょっと気に食わないが、まあ、それもよしとする。あのおっさんも、俺の嫁がおかしくなるのは避けたいはずだ。

・

午後まで寝て、それから食事の用意をした。うだうだと布団に融けている俺の嫁は、まだぼんやりとしているのか、適当に短くしたうどんを、箸で口へ運ぶと、ちゅるちゅると食べている。ちゃんと冷やしてあるから、猫舌の俺の嫁でも安全な代物だ。それらを食べさせていると、ようやく日常だ、という気分になった。

「・・・花月・・・・・」

「んー？」

「今、なんじー？」

「二時くらいかな。」

「う？　にじ？・・・・・・ええええーーーー」

いきなり、がばっと俺の嫁は起き上がろうとして、ぐぎっと腰を鳴らせた。ううっと唸って、パタンと布団に崩れる。

「おまえ、要介護の状態なんで、トイレとか、俺に言わんとあかんで？」

「・・・あ・・おっおまっっ・・・・・仕事・・・・」

「ああ、休んだ。有給あるし、別に使ってもええやん。・・・ていうか、こんな状態のおまえの世話をせんかったら、俺、鬼やんか。」

歩くのが不自由な状態の人間を放置するわけにもいかない。こうしてくれ、と、ねだったのは、俺の嫁だが、こうしたのは、俺だ。だから、世話はする。繋がりを直接的に感じたいと言うなら、それはくれてやるし、俺も感じたい。離れたら消えてしまうと泣かれるくらいなら、そのほうが嬉しい。

「・・・すまん・・・・」

「なんで謝るんよ。」

「だって、俺が言うたからやんか。」

「いや、なかなかエロてよかったで？　俺、ぐっとキたもん。」

「どあほっっ。」

「いやあー俺も、おまえが不足しとったから、ええ補給やったわ。今日は、なんもせんでええからな。・・・・・世話できへんかった分も補給させてもらう。」

「・・・・おまえ・・・・・正真正銘のあほやんな？　」

「失礼な。愛妻家と呼ばんかい。」

ほれ、もうちょっと食べとき、と、うどんを口元に運ぶ。花月のごはんは美味しい、と、俺の嫁は感想を漏らしつつ、うどん玉半分くらいは食べた。

「どうせ、おまえのことや、メシも碌な事になってへんかったんやろ。」

「いや、そうでもない。沢野のおっさんと堀内のおっさんが、適当にええもん食わせてくれてたと思う。あんま美味いとは思わへんかったけどな。」

「うーん、あっちの名物て、味噌煮込みとかしか知らんなあ。ああ、きしめんもあるんや。」

「食ったと思うで。よう覚えてへんけど。・・・・・ごめん・・・・・・」

「何の謝罪？　」

「わからんけど謝ったほうがええような気がした。」

「謝るようなことはあらへん。もう、ちょっと寝るか？　　ああ、せやせや湿布貼ったんの忘れてた。」

腰に湿布を貼る前に、身体を綺麗に拭いた。それから、トイレへ運び、それから、俺の部屋に転がす。昨日は、嫁の部屋でいたしたので、そちらは、シーツもどろどろになっていたから洗濯する必要がある。

「ちょっと洗濯するからな。本でも読むか？　」

「・・・いや、ねむい・・・・・」

「うん、ほんなら、寝とき。」

シーツをはがして、新しいのと交換した。それから、出張の洗濯物も取り出して洗う。ワイシャツは、二枚しか使っていなかった。後は、入れたまんまで残っている。汗をかかない季節やったから、それで済んだらしい。それらは、クリーニングに出すから、そっちの袋に入れて、下着だけ洗った。

夕方近い時間だったので、乾燥機に放り込み、やれやれと部屋を見回す。俺の嫁がいなかった一週間、ほとんど、ここで寛ぐこともなかったから綺麗なものだ。テレビをつけて、だらだらと観ているぐらいしかやることがない、とてもつまらない一週間だった。どうも、俺は、あの生活能力すら怪しい生き物がいないと、人生の退屈度がアップするらしい。

・・・・・人生の投げ遣り度と退屈度か・・・・・

人は、それぞれだ。どこかで、自分の人生に折り合いをつける。俺には、嫁が居れば、それで上々の人生なんだろうと思われる。

のんびりと窓の外を満足した気分で眺めていたら、嫁の呼び声が聞こえた。

「花月っっ。」

「なんや？　」

「・・・・・トイレ・・・・・」

「おう、ゆっくりな。」

ずるずると起き上がっているところをみると、朝よりは動けるようになったらしい。だが、まだ、しやっきりとはいかないので、肩を貸してトイレへ運ぶ。

「俺、いつか、腰いわすんちゃうやろか。」

「いわしたら、車椅子で介護したる。」

「いや、そうやなくて、もうちょっと大人しくしてくれたら、ええと思うねん。」

「ほな、頻度を上げてくれ。・・・一ヶ月に二回とか少なすぎるやろ？」

「え？　そんなしてなかったか？　」

「してへんわっっ。」

「・・・わかった。一週間に一回くらいは襲てくれ。」

「くくくくく・・・・ほんなら体力つけなあかんなあ。」

ずるずるとトイレへ運んで、扉を閉める。今更だと思うのだが、俺の嫁は恥ずかしがりなので、そこいらはけじめをつける。どうせ呼ばれるのだから、俺は、扉の前で待っているわけで、そのまんま会話なんかしていたりする。

「体力なんかつけられたら、俺が死ぬ。」

「どあほっっ、おまえの体力じゃっっ。肉食わすからな。ホルモンとか、鳥の肝とかええな。」

明日からの献立を考えつつ、俺は、鼻歌なんて口ずさんでいたりする。それに、嫁も付き合うように歌っているのが、なんとも平和で楽しい我が家だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1245q/

大きな猫

2011年10月8日12時47分発行